原作介入？めんどくさい！

牙蓮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
原作介入？めんどくさい！

【Ｎコード】
Ｎ９４５７Ｍ

【作者名】
牙蓮

【あらすじ】
原作介入する気の全く無いチートなオリ主と、原作介入しまくりたいチートじゃないオリ主。
そんな二人の物語。

第1話　プロローグはめんどくさい（前書き）

「天元突破リリカルなのは」を書いている者です。
そっちを書くのに悪戦苦闘しており、息抜きがてら、適当に書いていたらずいぶんと長くなってしまったので投稿して見ます。
もし、「天元突破リリカルなのは」をお待ちいただいてる方がおりましたら、1ヶ月も更新できておらず、本当に申し訳ありません。
ですが、必ず最後まで書きますので、もうしばらくお待ちください。

ちなみに、これはなんとなく書いていたものなので、続きは書くともいますが、いつになるかもわからなく、内容も自分が好き勝手適当に書くだけなので期待とかそういうのは一切しないほうがいいですよ。

第1話　プロローグはめんどくさい

「峻、まだ準備できないの？
　早くしなさい。峻？」

うるせえな。
誰だよ人が寝てるってのに騒いでる馬鹿野郎は。
そんなことを考えてると部屋の扉が開いた。

「峻！あんた何で寝てんのよ！
　ご近所に挨拶しに行くから支度しなさいって言ったでしょ！」

ドアを開けたと思われるおばさんがいきなり叫びだした。
周りを見ても誰もいないから、多分俺に言ってるんだよな？

「俺に言ってんのか？」

おばさんは呆れ顔になり

「当たり前でしょ。ほかに誰がいるの。」

「人違いだ。
　つーか、あんた誰？」

この発言はまずったかな。
おばさんの額に青筋がたって、肩がヒクヒクしてるもんな。

「母親に向かってあんた誰なんて聞くやつがあるか！

そんな子に育てた覚えは無いよ！」

これだけの大声、人間が出せるのか？というくらい大きな声で叫びやがったよ。このおばさん。
ついでに拳骨までもらったし。威力ありすぎだよ。この拳骨。すっげー痛ぇ。

ついで言っておくが、俺の名前は加藤雪人（かとう ゆきと）だ。
断じて、峻というなでは無い。んでもって、俺の母親はこのおばさんじゃない。
それは断言できるんだが…。逆らうのも面倒なんで、言われたとおり支度しようとしたとき、異変に気づいた。
手足が短い。周りの物がやたらと大きく見える。鏡があったので、自分の姿を確認すると、知らない小僧が映ってる。

「はぁ？何だこれ？夢か？分け分からん。ふざけんなよ。
ふざけんなあああぁぁぁぁぁ！」

思いっきり大声で叫んだんだが、またしても失敗だった。
おばさんが

「うるさい。なに騒いでんの。
さっさと支度しなさい！」

と再び拳骨をもらった。異常なほど痛い。このおばさん本当に人間なのかな？
これ以上騒いでまたあの拳骨もらうのいやだから、渋々この人の言うことを聞くことにした。
近所に挨拶している間におばさん（基、自称母）に質問して分かったことがいくつかある。

俺？の名前は井上峻（いのうえしゅん）
今年で９歳。小学３年生。明日から私立聖祥大附属小学校に転校するらしい。
今日この海鳴市に引っ越してきたばかりだそうだ。
これだけ聞き出すのに何回拳骨をもらったことか。拳骨をもらいたくなかったから言うこと聞いたのに酷いもんだ。おかげでタンコブだらけになっちまったよ（嘘）。
ちなみにどうでもいいかも知れんが、本来の俺はもう２１歳だ。高校卒業後就職したれっきとした社会人だ。
いまさら小学校なんか行きたくもない。
もともと、集団行動やら人とかかわることが苦手というか嫌いな俺にとっては学校というもの自体大嫌いなのだ。

そんなことを考えていると最後の一軒になったらしい。
我が家の隣の高町と言う家族らしい。何で隣の家が最後なんだろうな？まあいいけど。
おばさんが、中から出てきた多分２５歳位の女の人と挨拶をしている。
俺も挨拶しろとおばさんに言われたので一応挨拶をすると女の人は

「はじめまして。高町桃子よ。よろしくね。
今は出かけてていないけど、峻君と同い年の娘が二人いるの。
明日から同じ学校に通うから、仲良くしてあげてね。」

といわれた。内心は嫌だったが、そう言うわけにもいかないと思い

「分かりました。」

と言っておいた。

それから家に帰り、部屋でのんびりしていると

「マスター。お目覚めですか？」

と、声が聞こえた。

辺りを見回しても誰もいないので空耳かと思ったのだが

「マスター。スボンのポッケの中です。」

と聞こえたのでポッケに手を突っ込んでみると何か入っていた。

コアドリルが出てきた。

？見たことないタイプのコアドリルだな。

リボ〇テックに付いてきたやつや、グレート〇ンパクトに付いてきたやつとも違うし、シルバーペンダントとは全く違う

まあ、全部の種類を確認できているわけでもないだろうし、俺が知らないのがあってもおかしくない。

今の俺は俺じゃないしな。俺が知らないのを持っててもおかしくないだろう。

それに問題はそんなことじゃない。

「マスター。」

やっぱり、しゃべったよな。

「どっかにスピーカーかなんかついてて誰かがどっかでしゃべってんのか？」

「いえ、違います。私の意思でしゃべっています。」

・・・・・。どうする？信じる？それは無いけど…。どうするか。

まあ、とりあえず

「おい。」

「何ですか？」

「もし仮に例えば、ありえないがお前の意思でしゃべっているって言うんなら、今後一切しゃべるな。」

「な！マスター！何を言っているんですか。これから大事「しゃべるなって言ったんだ」・・・。」

「俺は気が短いんだ。次は無いと思え。
自ら黙るか、俺に二度としゃべれないようにされるか。
選べ。」

玩具はしゃべらない。プログラムされたことを再生するとかならわかるが、自分の意思でしゃべるなどありえないことだ。これは俺の知っている限り、全国、いや、世界共通だ。

「……分かりました。」

それ以降一切しゃべらなくなった。これでよし。
理由はわかんないけど、このコアドリル、なんか凄い惹かれるんだよな。
今まであったほかのやつじゃ、ここまで惹かれなかったのに何でだろう？
まあいいか。見た目は良いし、飾っとこ。

翌日、行きたくないが、行かないとおばさんがうるさいし、拳骨はもらいたくないので学校に行く。

「今日は新しいお友達を紹介します。入ってきて！」

廊下で待たされていると、担任の声がしたので中に入りる。

「今日から皆と一緒にお勉強する、井上峻君です。皆仲良くしてあげてね。

峻君、自己紹介お願いね。」

「井上峻だ。」

一言。そういって俺は黙った。

数秒たって先生が

「えっと、ほかに何か言うことは？」

と聞いてきたが、無視。

「じゃ、じゃあ、誰か質問のある子いる？」

その言葉を聞き、やばいと思い、声を出す。

「悪い。一つ言い忘れてた。

俺はあんたらと仲良しごっこをするつもりは無い。

俺からあんたらに関わることは必要最低限しかない。だからあんたらも必要以上に俺に関わるな。」

これだけ言っておけば、誰も関わってこないだろうと思ったのだが、言い終わった瞬間に誰かが椅子を倒し、勢いよく立ち上がった。これだけなら無視したのだが、次の一言は聞き逃せなかった。

「セツ！あんたセツでしょ！」

まあ、なんだ。セツって言うのは本来の俺のあだ名だ。それを知っているやつは俺の地元にはたくさんいるが、そう呼ぶやつは2人しかいない。俺がセツと呼ぶことをゆるさないからだ。2人以外が俺のことをセツと呼ぶと間違いなく俺がぶち切れることを知っているしな。

とりあえず、このガキ、病院送りにするか？その前にどこでそのあだ名を聞いたとか、どうして分かったのかを聞くべきか？真面目にそう考えていると、再びそのガキがじゃべり出した。

「私よ。ナミよ。新井菜美(あらいなみ)よ。」

説明すんの面倒だが、もう一回説明だ。
新井菜美って言うのは、俺のことをセツって呼ぶことを認めたやつの一人だ。
だが、ナミは俺と同い年で、今は大学生のはずだ。間違ってもこんなところで小学生をやってるガキではない。どう反応するか悩んでいると今度は先生が

「雪(セツ)ちゃん。いきなり何を言っているんですか？」

といった。
セ、セツだと！？このガキ、セツって言うのか。ふざけんな。

じゃあ何か？他のやつらがこいつを呼ぶたび俺は不快感を味わなければならないのか？そんなのはごめんだ。

「先生！私のことはユキって呼んでくださいっていつも言ってるじゃないですか！お願いしますよ。」

と、ガキが言った。

どれだけのやつらがユキと呼んでいるが知らんが、少しほっとした。

「はいはい。分かりました。
じゃあ。もう授業始めますよ。
峻君はあの空いている席に座ってね。」

と窓際の一番後ろの席を指差した。

あのガキに聞くことがあるのだが、しょうがない、後にするか。

そして、1時間目の授業も終り、休み時間。

あのガキのところに行こうとしたら、向こうからこっちに近づいてきた。

ガキの周りに、3人誰かいたが、その3人は来なかった。少し安心。

人がいないところまで移動するとか面倒なこと言い出したが、一応、従うか。

「おい、お前なんでセツを知ってる？んで、何で気づいた？」

「だから言ったじゃない。私はナミよ。
あんたがよく知ってる、ナミよ。」

「ふざけるな。
あいつは今大学生だぞ。お前みたいなガキじゃない。」

「あのね、セツ。あんただって今はただのガキじゃない。
それで人のことガキって言うのやめてよね。」

まさかこいつも俺と同じか？

「じゃあ何か？お前も気づいたら見知らぬガキの姿になってたのか？」

「え？あ、あんた、赤ちゃんからやり直したんじゃないの？
ていうか、デバイスから話し聞いてるんじゃないの？」

こいつ、何言ってんだ？

「はぁ？赤ちゃんから？デバイス？何だそれ？
俺は昨日、気づいたらこの姿だったんだ。」

「マジで！
デバイスはどうしたの？」

「だからデバイスって何だ？」

「！え？しゃべるアクセサリーとか宝石とか持ってないの？
魔法を使うためのアイテムよ。」

しゃべる玩具ならあったが、魔法だと。
ふざけんじゃねえよ。

「おい、お前が本当にナミだって言うんなら、俺がそういうくだらないアニメとかみたいなもの嫌いだって知ってるよな？

お前がアニメ大好きなオタクなのは知ってる。それについて文句は言わない。
だが、俺を巻き込むなっていつも言ってんだろ。」

「ちょ、ちょっと待って。
本当に持ってないの？そんなはずあるわけ無いでしょ。」

何でこんなに喰いついてくんだよ。
コアドリルのこといったら、俺がグレンラガン見てたことばれんじゃねえかよ。
本来の俺は、アニメに全く興味が無い。大嫌い。って言う性格で通してたからな。
実際、グレンラガン以外のアニメなんてまともに見た記憶ないしな。
たまたまみたグレンラガンに思いっきりはまったけど、そのことは誰にもばれてないし。

「あんた、何か隠してるでしょ。
セツ、分かってるでしょ。
私が嘘をついてもあんたに分かるように、あんたが嘘をついても私には分かるのよ。」

確かにそうだ。俺とナミともう一人俺をセツと呼ぶことを許したやつ。この3人の中で嘘をついてばれないことはありえない。昔からそうだ。グレンラガン好きがばれなかったのは奇跡に近いかもしれなかった。もう観念するか。
もうこいつをナミだって認めるしかないしな。

「しゃべるコアドリルならあったよ。」

「やっぱり。

あんたグレンラガン好きだったんだ。」

「え？気づいてたのか？」

「確信は無かったけどね。
で、なんで話は聞いてないの？」

「簡単なことだ。
昨日、いきなりしゃべりだして、自分の意思でしゃべってるとか言い出したから、二度としゃべるなって言っといた。
玩具はしゃべらない。これは世界共通だ。当たり前だろ。」

「呆れた。あんた実際に見て聞いたんでしょ？それを無かったことにするなんて馬鹿じゃないの。
大体、ここはアニメの世界よ。しゃべる玩具があっても不思議じゃないでしょ。」

・・・こいつなに言ってんだ？アニメの世界？マジでぶっ飛ばされてぇのか？
そういやぁ、さっきも魔法とか抜かしてたな。

「いい加減にしろよ。何度言った「本当よ」、んだと。」

「私が嘘ついてるかどうかわかるでしょ？本当のことなの。」

確かに、本来のナミが真剣に嘘偽りの無いことを言っているときの顔と同じ表情だ。
だからといって信じられるわけが無い。…けど、信じてみるか。数少ない親友の言うことだ。

「わかった。そのことは、一応信じてやる。」

「よかった～。じゃあ、帰ったらデバイスと話してね。魔法のことと色々聞いとくのよ。
もうすぐ原作も始まる頃だし、セツには色々やってもらうことあるんだから。
悲しいことに、あんたがいないと私一人じゃ何にもできないのよ。」

「断る。」

「な！なんで？」

「お前が言う通りこれがアニメの世界だとしたら、ちゃんとした結末があるんだろ？だったら別に俺が何かしなくてもそれなりにいい終わり方すんだろ。
それに、一応お前が言ったことは信じてやるが、俺がそういうのが嫌いなことに変わりは無い。魔法だのしゃべる玩具だのそんなくだらないものに付き合うつもりは無い。」

「で、でも、だめなのよ。
原作に関わらないと、セツ、あんた死ぬのよ。」

なに言ってんだこいつ。今日のこいつはよく分からんことばかり。

「どういうことだよ？」

「あたしらをこの世界に送った自称神に言われたのよ。
あんたが原作介入しないと、あんたが死ぬって。
あんたも会ったんでしょ？自称だけど神に。」

今度は神かよ。全く、ふざけてんな。
まあ、すっかり忘れてた（というか、いやなことだから記憶から抹消してたが）確かにこの姿になる前に神とかぬかすジジイにはあったけど、それを信じろと？無理だろ。

「くだらねぇ。あんなんが神でたまるかよ。
大体、お前知ってんだろ？俺が生きることに執着心が無いって。
自分で死ぬ勇気は無いけど、なんかで死ぬんだったらそれはそれでかまわない。
そういうことだ。だから、とりあえず、死ぬまで自由気ままに生きるから、お前も自由に生きればいいだろ。
さ、次の授業始まるぞ。」

そう言い、俺は教室に向かって歩き出した。

第1話　プロローグはめんどくさい（後書き）

セツ「なんだか、ずいぶんいきなりな始まりかただし、まともに原作キャラ出て無いじゃん。大丈夫か？」

牙蓮「本当にな。大丈夫なのか？この駄文。」

セツ「…。これ書いてんのあんただろ。何だよその他人事みたいな言い方。」

牙蓮「いや、こっちはそれほど本気で書いてるわけでもないし、先のこと、一切考えてないからな。」

セツ「いいのか？それで。」

牙蓮「いいんじゃん？
　俺はこっちより、もう一つの方を書くのに全力投球だからな。こっちはただの息抜きだ。」

セツ「もう勝手にしろ。」

牙蓮「そうさせてもらう。
　次はいつになるかわかりませんが、もしよければ読んでやってください。
　それでは、またいつか。」

第2話　息抜きのはずなのに・・・（前書き）

こっちは息抜きのはずなのに、こっちしか話が書けない。
もう一個のほうもどうにかしなければ。

今回、多分キャラ崩壊してると思うので、そういうのが嫌いな方は見ないほうがいいですよ。

第2話　息抜きのはずなのに・・・

ｓｉｄｅナミ

私がこの世界に来る前の事。

私は急にとてつもない眠気に襲われ、意識が途絶えた。
次に目を覚ましたとき、そこはあたりいったい真っ白で何も無いところだった。
それで、自称神と名乗るおじさんが出てきた。

私はとても興奮したのよ。チート能力つきのオリ主になって、アニメを好きなようにいじくれる。
そう思ってって、テンションマックスだった。なのに・・・。

あの自称神、先に送ったやつに力の大半を使ってしまい、残りの力ではそれほどいい能力は付けられないとか言い出したのよ。
じゃあ何であたしをここに呼んだのよと思い聞いてみると、先に送ったやつがなのはのなの字も知らないやつだったらしいの。ついでに言うと、グレンラガン以外のアニメをほぼ知らないとか・・・。
アニメの世界に送るって言っても一切聞く耳持たず、勝手にどこかへ行こうとしたから、説明なんてしないで無理やり送ったみたいなの。それで、デバイスに色々話すように言ってあるから大丈夫だとは思うけど心配だからもう一人送ろうかと思い、私を呼んだらしい。

それで私がもらった能力は、ほんの少しの魔力。念話がどうにかできる程度はあるとは言ってたけど。
それから、“ラムダ・ドライバ”を使えるとのこと。

なんでラムダ・ドライバ？と思っから聞いてみると、残りの力で付けられるよさそうな能力がこれだけだったらしい。で、デバイスの変わりに“アル”のＡＩ付きの腕時計をもらった。それを身に着けてないとラムダ・ドライバは使えないらしい。その上、何故か魔力を消費するので使用は一日一回出来ればいいほうだとか。
全く、ふざけたもんよね。まあ、何もないよりましだと思って、頑張りますか。

先に送ったやつには原作が始まるまでには会えると思うといわれた。そいつの特徴とか聞こうと思ったんだけど、聞く前に私の体が消え始めた。
自称神の力が尽きたそうだ。それでもちゃんとなのはの世界には行けるらしいのでかまわないけどね。
私が完全に消える直前にあいつが言った一言がものすごく気になった。

「確か、名前は加藤ユキ」

最後まで聞こえなかったけど、確かに、加藤ユキって言った。まさか加藤雪人、セツ！？と思ったけど確認するすべは無い。
もし本当にセツなら会えばすぐに分かる自信ある。早くそいつに会いたい。

そんな感じでこの世界に着たんだけど、次に目が覚めたとき、私は生まれたばかりの赤ちゃんだった。
しかも、なのはの双子の姉。これは色々とやりがいあるじゃない。
まずはなのはの性格どうにかしないとね。父さんの怪我したときは、今迄で一番苦労したよ。そのおかげで原作より多少はよくなった・・・と思いたい。

それ以降はとくに何事も無く、平穏無事な毎日だった。アリサやすずかとも仲良くなれし、あとは早くセツが現れるのを待つだけか。まあ、セツかどうかまだわかんないけどね。

そしてその日はついにやってきた。
いきなり転校生が現れたのだ。名前は井上峻。
それだけなら分からなかっただろう。セツだと分かった決め手は自己紹介後の言葉だ。

「悪い。一つ言い忘れてた。
俺はあんたらと仲良しごっこをするつもりは無い。
俺からあんたらに関わることは必要最低限しかない。だからあんたらも必要以上に俺に関わるな。」

こんなことを言うのはセツしかいない。そう確信した私は立ち上がり

「セツ！あんたセツでしょ！」

と叫んだ。
その後のやり取りは前回書いたから省くとして、休み時間。
私の周りに驚いた様子でなのはとアリサとすずかがやってきた。
説明は後でするからといい、3人をその場に残し、絶対についてこないでね。と言いセツに向かって行った。

で、色々話したわけなんだけど、予想外だった。
確かに、セツが原作をどうこうしようとするわけが無いとはわかっていたけど、まさかデバイスと話すらしてないなんて。
どうにかしてセツに手伝ってもらわないと。セツが死ぬって言って変わると思ってなかったけど、本当のことだから、一応言ってみた

けど無意味だし。
どうやって巻き込もうか。それを考えているだけで2時間目の授業は終わっていた。

休み時間になったとたん、クラスの男子が数人、セツの周りによからぬ空気を持ち集まっている。
このクラスって、あんなに命のいらないやつたくさんいたんだ。とか思いながらぼけ～とそっちを見ている。
ふとなのはの方を見てみると、なのはもセツに向かって行きたそうにしている。あれ？なのはも命無駄にしたいひとだったの？

ｓｉｄｅなのは

今日は転校生が来ると聞いて楽しみにしてました。
なのに、その転校生はとても怖かったの。
怖かったけど、ものすごく気になります。
この人、今日、私の家にお泊りに来るって言ってたけど、大丈夫かな。
少し考えているとお姉ちゃんが勢いよく立ち上がり、びっくりしました。
それ以上に次の言葉には驚きました。

「セツ！あんたセツでしょ！」

え？何を言ってるの？セツはお姉ちゃんの名前でしょ。そう呼ぶとものすごく怖いから呼べないけど。

「私よ。ナミよ。新井菜美。」

何を言ってるんか本当に分かりません。お姉ちゃんどうしちゃったんだろう。心配です。
休み時間になったらちゃんとお話し聞かなくちゃ。と思ったのですが、休み時間になってお姉ちゃんのところに行くと

「ごめん。説明は後でちゃんとするから、待ってて。
私、これからあいつと大事な話しあるから。絶対着いてこないでね。」

とっても怖い顔で言われたの。
井上君のところに行くとすぐに井上君とどこかへいってしまいました。
む～、お姉ちゃん、ずるいの。私も井上君とお話ししたいの。
次の休み時間になったら、お姉ちゃんそっちのけで井上君のところに行こうと決めました。

なのに、休み時間になったら今度は井上君の周りに男の子がたくさん集まってしまいました。
これじゃぁ、近づけないの。どうしようか悩んでいたら井上君は帰り支度を始めてそのまま廊下へ歩き出したの。
え？帰っちゃうの？何で？だめだよ。まだお話ししてないのに。
そう思い、気づいたときには井上君の前に立ち

「帰っちゃだめなの！お話しするの！」

と叫んでしまいました。

ｓｉｄｅセツ

２時間目の授業も終り、休み時間。
ナミと話すこともない、というか、色々うるさく言われそうだから
あまり話したくないし、やることないし寝るか。と思っていたら多
分同じクラスのやつが３人ほど俺の周りにやってきた。
おかしいな。最初にああ言ったのに何故俺に近づいて来るんだ？ぶ
っ飛ばされたいのか？

「おい、転校生！」

・・・やっぱり声かけてきたよ。なぜか怒気を含んだ声で。俺、何
かしたか？

「ユキちゃんとどういう関係だ！」

ユキちゃん？誰だ？
誰でもいいか。ほっといて寝よ。しつこいようならぶっ飛ばすけど
な。

「聞いてんのか！おい、転校生！」

だ～、うるせえな。何で俺の周りは俺の眠りを妨げるやつばかりな
んだよ。
このまま騒がれるのは嫌だし、一言文句言うか。

「うるせえな。てめえらこそ聞いてなかったのか？
俺に関わるなって言ったよな。小３の馬鹿な頭じゃ理解できなか
ったか？」

「な！てめえ！ふざけんな！」

一番偉そううにしてたやつが顔を真っ赤にして腕を振り上げた。
お！やる気か？返り討ちにしてやるぜ。と思ったんだけど

「お、落ち着けって。
お前が暴れたらこいつ死んじゃうぜ。」

と隣にいたやつが大慌てで止めに入った。
それにおとなしく従い、腕を収めちゃったよ。なんだよ、やめんのかよ。
まあ、俺もそこまで好戦的じゃないからいいけどな。

「で、どういう関係だ？ユキちゃんとは？」

だからユキちゃんて誰だよ。
そんなこと思っていると、俺なんか関係なく思い切り真剣な顔で語りだした。

「いいか、ユキちゃんとそれからいつも一緒にいるなのはちゃん、アリサちゃん、すずかちゃんは俺達、いや、このクラスのアイドルだ。勝ってに手を出したら承知しないからな。」

・・・・・・こいつら大丈夫か？小3だよな？普通小3でこんなこと考えないよな。
こいつら大人になったら絶対にどっかのアイドルの追っかけやってるよな。というか、下手したらストーカーになんじゃね？

「分かったか。」

ったく、うるせえな。本当にこいつら俺の話し聞いてねんだな。

「うるせえな。俺は誰とも関わらないって言ってんだろ。」

「じゃあ、何で学校来てるんだよ。」

いや、何故そうなる？

「別に来たくて来てるわけじゃない。
分かったらさっさともどれ。邪魔だ。」

「来たくなきゃ来なければいいだろ。
帰っていいよ。俺が許す。帰れ。」

さっきの一番偉そうなやつがこんなことといってるが、お前にそんな権限あんのか？
まあいいや、それじゃあお言葉に甘えて帰るとしますか。
帰り支度をして歩き出すと、ナミ？が俺の前に立った。
ナミだよな？顔はナミなんだけど、髪形さっきと違う。何で変わってんだ？それに雰囲気も違うし、別人みたいだ。

「帰っちゃだめなの！お話しするの！」

・・・・・・・・はぁ？！な、なに言ってんだこいつ？ふざけんのも程ほどにしろよな。

「ナミ、お前の性格っていうか、しゃべり方とか行動を、俺からあまり文句は言いたくはないけど、そのへんなしゃべり方はやめろ。気持ち悪い。
俺以外のやつに使うならかまわないが、俺にはやめろ。」

面白かったよ。最初、俺の前に立ったときのナミ？の顔は真剣そのものだった。ナミ？が言ったことに対し、俺が頭の中を整理しているとき、ずっとナミ？の顔を見ていたんだがそのときは顔が赤くなってた。

んで、さっきの俺の言葉を聞いたとたん、ナミ？の表情はどんどん暗く悲しい表情になっていった。まさかショックだったのか？いや、あいつがこんなことでショックを受けるはずがない。

そんなことを考えていたら、俺の脳天に『バシン』と衝撃が走った。こ、この懐かしい衝撃は、まさか！と思い、振り返ると最初のときと同じ髪型のナミがハリセンを自分の肩に軽くパンパンとたたきながら立っていた。やっぱりナミのハリセンだ。久しぶりに喰らったな。

ん？待てよ。何でナミがいるんだ？あれ？さっきまで俺の前にいたよな？

「あんたねぇ、なのはになんて事言うの！大体、いくら私でも流石にあんなしゃべり方しないわよ。」

お！ナミがなんか言ったとたん、ナミ？がさらにショックを受けたみたいだ。その場に崩れ倒れたよ。

「私はナミじゃないもん。なのはだもん。ナミって誰？私のしゃべり方、そんなに変なのかな。」

とか何とかナミ？がその場で体育座りをして、人差し指でのの字を書きながら、ぶつぶつと同じことを何度もつぶやいている。

「ご、ごめん。なのは。本気でそんなこと思っているわけじゃないよ。こいつが変なこというからついつられて言っちゃっただけなの。だから機嫌直して。ね？」

「本当？」

「本当に決まってるじゃない。なのはのしゃべり方はかわいくてとってもいいと思うわよ。」

ナミがそういうと、ナミ？はものすごい笑顔になりやがったよ。お世辞だって気づかないのか？
まあいいや。こんなやつら相手にしてないで帰るとするか。

「って、ちょっとセツ！どこ行くのよ。」

ナミが聞いてきたので振り向かずに、手を挙げ、ぶらぶら振りながら

「帰るに決まってんだろ。
じゃあな。」

と歩きながら言った。

「え、井上君！今日私たちのおうちに泊まるんでしょ？一人で帰っても中にはいれないよ。」

はあぁぁ？！？！？

「あーーーーーー！！！！！
忘れてた。転校生だ。そっか、セツの事だよね。名字も井上であってるし。」

いや、待てよ。二人で勝手に話を進めるな。どうしてそんな話になってんだ？

「なに言ってんだ？お前ら。俺にも分かるように説明しろ。」

「え？聞いてないの？」

んで、説明を聞いたんだが、ふざけるなと叫びたい。
うちの隣の高町とか言う家、こいつらの家だったらしい。そういや～俺と同い年のやつ二人いるっつて言ってたな。
で、俺の親が仕事で今日は帰れないらしい。というか、帰りがいつになるかわからないんだとよ。で、俺一人じゃ心配だからうちの親が隣の家、まあ、高町家の人に頼んだんだって。
いったい何のためにここに引っ越してきたんだ？まだまともに生活してないぞあの家。

「断る。」

「え？何を？」

「決まってんだろ。お前の家に泊まることをだ。」

ナミはやっぱりかという表情をしていて、ナミ？は驚いている。

「お前の家にいるのがナミだけならかまわないが、そのナミ2号もいるし、親だっているだろ。そんなところに厄介になるのはごめんだ。」

「もしかして、ナミ2号って、なのはのこと？」

「にゃーーー！何でなの？私はなのは。高町なのななの！」

ピーピー、ピーピー、うるせえやつだな。こいつのこのムカツクしゃべり方、どうにかならんもんか。

「知るかよ。いちいち他人の名前なんか覚えてられっかよ。いいだろ？ナミ2号。分かりやすい上に覚えやすい。」

「よくないの！それにナミって誰なの？
お姉ちゃんの名前はセツだよ。そう呼ぶと怒るけど。」

え？あ！そういえば

「そうだよ、なにお前俺のあだ名、ちゃっかり自分の名前にしてんだよ。俺への嫌がらせか？」

ったく、本当にふざけたやつだよな。

「ち、違うのよ。
私が生まれたときの第一声がオンギャーとかじゃなくて“セツ”だったのよ。それで私の名前はセツにしようっていう事になっちゃったの。まあ、セツって呼ばれるのいやだからユキって呼んでもらうようにしてはいるんだけどね。」

生まれた時の第一声がセツなんてありえないだろ。ったく、こいつは本当に…。ガキになってからふざけたことばかりぬかしやがるな。

「ああ、そうだ。
あんたの母から言われたんだけど、もしうちに泊まらないで勝ってなことしたら“拳骨１００回の刑”だって言ってたわよ。」

な、ん、だと。今こいつなんて言った？拳骨１００回だと？あああ、

あのおばさんからの拳骨か？そんなモン喰らったら俺、原形保ってないんじゃないか？やばい。死ぬのはかまわないが、痛いのはいやだ。どうする？

「そ、それは本当のことか？」

「本当のことだけど、どうしたの？あんたらしくも無い。そんなに怯えちゃって。」

あの威力を知らないからそんなことが言えるんだ。一回喰らったら絶対のお前も恐怖を抱くぞ。

「わ、分かった。今日はお前の家に厄介になる。」

第2話　息抜きのはずなのに・・・（後書き）

ナミ「あんた、こっちばっかり書いてて良いの？」

牙蓮「全然よくない。けど、もう一個のほう、全然進まないんだよ。自分も凄い困ってんだよ。」

ナミ「しょうがないやつね。ところで、何で私、フルメタルパニックねたが多いのかしら？」

牙蓮「それは、最初息抜きでこれじゃなくて、グレンラガンとフルメタのクロスを書いてたんだけど途中で投げ出して、で、気づいたらこうなった。まあ、もともとフルメタ大好きってのもあるからしょうがないよ。」

セツ「で、今回キャラ崩壊とあったが、してたのか？」

牙蓮「さあ？」

ナミ「さあ？ってあんたねえ。」

牙蓮「しょうがないだろ。そこまでなのはの性格知らないんだから。アニメよりも自分が呼んだ事ある小説のなのはの性格のほうが自分の印象に残ってるからな。それが崩壊してるのであればこっちでも崩壊。してなければ普通何じゃん？」

セツ「つくづく適当なやつだな。」

牙蓮「あたぼうよ！」

ナミ「こんな変なやつの書いている駄作ですが、もしよろしければ今後もよろしくね。」

セツ「まあ、次はいつになるかわかったモンじゃないけどな。」

第3話　話が進まない（前書き）

いつもより少し短めです。ごめんなさい。

第3話　話が進まない

全く持って納得できないが、ナミの家に泊まることになり、今すぐに帰ってもしょうがないのでとりあえず放課後まで学校で過ごすか…。面倒だな。

ありえない！これはありえないだろ！こんなの学校じゃない！
今、俺は心底そうに思っている。理由？そんなの簡単だ。“給食が無い”。
給食が無いなんて小学校じゃない。俺が小学校に通ってた頃に俺の周りにいた連中なんて、学校に来る理由の8割は給食を食べに来てるんだぞ。給食が無い日はサボったやつすらいたくらいだぞ。それなのにこの学校、毎日給食なしだと。それでよく不登校者が出ないもんだな。驚きだよ。本当にいったいどうなっているんだ。
そんなことを思っているとナミが近づいてきた。

「セツ。お昼一緒に皆で食べよ。」

とか言ってきやがった。食べよったて俺、飯持ってきてないし。いや、たとえ持ってきてたとしても、“皆で”はありえないがな。

「御免蒙(ごめんこうむ)る。」

「はぁ、言うと思った。
なのはたちも一緒に食べたいって言ってるから、今日だけでもお願い。ね？」

？なのは“たち”？2号以外にもいるのか？だったらなお更嫌だ。

分かっててていってるんだろうな、こいつ。

「諦めろ。」

「あれ？セツ、お弁当は？」

「・・・もう食った。」

「持ってこなかったのね。
私のわけてあげるから、行くわよ。」

「いいよ。別に飯なんか2，3日食わなくても問題ない。
それに俺からすれば、飯が食えないことより、他人と接するほうが地獄だ。」

断り続けていると、金髪のガキが近づいてきた。
おいおい、この年から髪染めかよ。

「ちょっとあんた、人がわざわざ、転校初日で寂しいだろうと思って、親切に声かけてあげてるんだから、素直に従いなさいよ。」

「誰だよ？あんた。」

「アリサ・バニングスよ。声かけてもらって、感謝しなさい。」

外人か？だったらあの金髪は地毛か？
バーニングス。女にはしておくにはもったいない名字だな。まあ、俺はそんな苗字は勘弁だがな。長すぎだ。
確か、バーニングは燃えるとかの意味があったよな？燃えるといえば火？バーニング“ス”で複数形だから炎（ほのお）でいいか。

「おい、炎。最初に言っただろ。俺に関わるなって。
文句はあっても感謝の気持ちなんぞ一切無い。」

「誰が炎よ！アリサ・バニングスだって言ってるじゃない。どうやったら炎になるのよ！」

ったく、どいつもこいつもピーピー、ピーピーうるせえな。名前なんかどうだっていいじゃねえか。
え？なに？じゃあ何で“セツ”って呼ぶと怒るかって？そんなの決まってんだろ。特に理由は無い。ただ、大して仲良くもないやつらになれなれしくされたくないだけだ。んで、俺が勝手に呼んでいるのは誰がどう聞いてももなれなれしくないだろ。まあ、あとは俺が自分勝手ってだけだ。気にするな。

「ユキ、こんなやつほっといて行くわよ。」

よかった。炎がナミをつれて去って行ってくれた。

ふう、それにしても給食が無いとはな。もう学校に来る理由なくなったな。それでも来ないとなんだけどな。明日から昼飯どうするか。

その後は特に何事も無く、放課後。
一人で勝手に帰りたかったのだが、先に帰っても中にはいれないし仕方なくナミ、2号と一緒に下校中だ。
炎ともう一人一緒にいたやつはいない。そのことはよかったな。

「で、お前らどこ向かってんだ？」

ナミたちが家とは違うほうに歩き出しやがった。

「家が経営してる翠屋って言う喫茶店に行くのよ。」

「もちろん、井上君も一緒なの！
おいしいケーキがたくさんあるんだよ。」

ちょっと待て。何故俺がそんなところに行かなくちゃいけないんだ？

「そんないやそうな顔しない。いいじゃない。あんた甘いもの好きじゃない。」

「ふぇ！そうなの！意外なの。でもよかったね。」

「確かに甘いものは嫌いじゃないが、やたらと甘ったるい匂いがするところや、人が多いところは嫌いだ。自分が食う分だけ買って帰るぞ俺は。」

その後、俺はあまり言葉を発しないで、ナミと2号だけがやたらうるさくしゃべりながら歩いていて、気づくとその翠屋という店の前についた。
外から中が見えたのだが、思ったことは一つ。入りたくない。
人、多すぎだろ。しかもほとんど女じゃねえかよ。絶対うるせえじゃねえか。その上甘ったるい匂いがするところだぞ。俺が嫌なことが満載じゃん。

「ほら、セツ。さっさと入るわよ。中に父さんと母さんがいるから挨拶でもしときなさい。」

っち、世話になる以上何も言わないってのは人として駄目だよな。

まあ、駄目人間でも俺はかまわないような気もするがな。
せっかく一人で好き勝手生きられる歳になったっていうのに、いまさら他人に世話になるなんてな。酷いもんだ。元の体に戻りてえな。そうすりゃ自由気ままなのにな。っと、そんなこと考えててもしょうがないか。

「「ただいま～。」」

「・・・・お邪魔します。」

ここ、店だよな？ただいまなのか？かく言う俺も、お邪魔しますでいいのか？

「あ、ユキ、なのは、お帰り。
峻君もよく来たわね。ゆっくりしていってね。」

嫌だ。挨拶を済ましてさっさと帰る。予想以上にうるさいし甘ったるい匂いがする。１秒でもいいから速くここを出たい。

「今日一日お世話になります。よろしくお願いします。」

「あら、礼儀正しいのね。えらいわ。」

これでも一応社会人やってたからな。うちの会社、上下関係かなりうるさいからな。つっても上は社長含めて４人だけだがな。
奥から誰かがやってきた。多分この人が父親だろう。若いけどな。
この人も２５位かな。ナミの歳のガキがいてもまあ、不思議じゃないかな？いや、早すぎるか。１６位で生んだことになるもんな。この人らいったいいくつだ？

「君が峻君だね。高町士郎だ。ユキとなのはの父だよ。よろしく。」
やっぱ父か。本当にいったいいくつだ？
「どうも、はじめまして。井上峻です。
今日一日、よろしくお願いします。
では、俺は帰らせてもらいます。」
「もう帰るのか？ゆっくりしていけばいいじゃないか。」
「いえ、俺はこういうところ苦手なので。すみません。」
そう言い出口に向かって歩き出す。
「ナミ、行くぞ。お前いなくちゃ中にはいれないだろ。」
「ちょ、セ、じゃ無かった。えっと峻。まだ選んでも無いじゃない。」
？なんだ、こいつ？わざわざ呼び直さなくていいだろ。ナミにそう呼ばれるのはなれないというか変な気分だ。
まあいい、別にケーキなんか無くてもいいだろ。
「そんなに食いたきゃ、お前一人、後でまた来ればいいだろ。」
そう言い店から出て行く。
「もう、分かったわよ。なのは、先に帰ってるね。」

ｓｉｄｅなのは

お姉ちゃんと井上君、すぐに帰っちゃったの。私も追いかけようと思ったんだけど、

「ねえ？なのは。峻君、ユキのことナミって呼んでなかった？」

お母さんが聞いてきたの。

「え、うん。私もよくわかんないんだけど、井上君はいつもお姉ちゃんのことナミって呼ぶの。お姉ちゃんは井上君のことセツって呼ぶし、分からない事だらけなの。それにお姉ちゃんと井上君、凄い仲良しなの。」

「ほう、ユキのやつがね。あれだけセツって呼ばれるのを嫌ってたのと関係あるのかな。」

「そうね。後で聞いてみましょう。
なのは、これ持っていってあげなさい。ユキは喜ぶだろうから。お願いね。仲良くするのよ。」

お母さんはケーキの詰った箱を私に預けてそう言いました。それからすぐにお姉ちゃん達を追いかけたの。

ｓｉｄｅセツ

はぁ、久しぶりに畏まったせいか、ものすごく疲れた。だから嫌なんだよ。他人の家に泊まったり、他人と接するのは。

「ねえセツ。どうしても原作に関わるの手伝ってくれないの？」

いまさら何を言ってやがる、こいつは。

「当たり前だろ。めんどくさい。」

「じゃあさ、もしこれがグレンラガンの世界でも関わらないの？」

「関わってどうすんだよ。」

「え？たとえばカミナを死なせないとか、キタンやだいグレン団の皆を救うとかいろいろあるじゃない。」

・・・・・こいつ駄目だな。

「ありえない。」

「え？」

「もし仮に、ここがグレンラガンの世界だったら、すげー喜ぶよ。生でグレンラガン見られるしな。

でも、話には一切かかわらない。カミナが生きてたりキタンがあそこで自分の命を懸けないような話であれば、それはもうグレンラガンじゃない。まあ、ゾーシィ、キッド、アイラック、ジョーガン、バリンボー、マッケンは劇場版では生き残ったからいいとしよう。だが少なくともカミナとキタン、そしてニア。この3人がもし生きてエンディングを迎えるグレンラガンがあったとしても俺はそれを認めない。紅蓮学園篇とかの本編とはほぼ無関係のやつならかまわないけどな。今後公式のアニメ本編でそういうのが出来たとしたら、

間違いなく俺はグレンラガンに一切興味を持たなくなる。」

これは間違いなく確実だ。カミナがあそこで死ななければシモンは成長しない上に、シモンはカミナしか意識しなくなる。カミナとシモンのＢＬものと見られるのは困るから、シモンがヨーコを意識しているようにしたみたいなこと作者も言ってるしな。キタンとニアはそういう点では死ななくてもいいかもしれないが、俺はそれを認められない。理由は長くなるから言わないがな。まあ、もう十分長いか。スマンな。

「もっとも、それと今俺が関わらないのは関係無いけどな。
この世界が何のアニメかも知らないし、別段知りたいとも思わないし。グレンラガンじゃないんだから話がどうに変わろうと興味ないしな。」

「え？何のアニメか知らなかったの？まぁ、当然といえば当然よね。いまさら何言ってるんだろ私。
ここは魔法少女リリカルなのはの世界よ。」

別に知りたくなかったんだが・・・・・はい？

「今、お前なのはって言わなかったか？」

「言ったわよ。」

「まさか、主人公って2号か？」

「そうよ。」

ってことは何か？もう関わってるのか？いや、まて、確かこいつも

うすぐ始まるとか何とか言ってたよな。ってことはまだ始まってないんだよな。
今からでも遅くは無い。2号に関わらないように・・・無理か。少なくとも今日一日は同じ屋根の下。でもって同じ学校、同じクラス。どんなに足？こうと顔はあわせることになるよな。それでも、極力距離をおくことに変わりは無いがな。まったく、何で俺がこんなことに悩まなくちゃいけないんだよ。

「ねえ？どうしても駄目？」

「何度も同じことを言わせんな。大体、俺に何が出来るってんだ。ただのガキだぞ。」

この体になる前は自分なりに結構鍛えていたつもりだから、力、体力には自信あったけど今どこまで動けるかも分からんしな。

「だから、デバイスと話してっていてるじゃない。あんたにどんな能力があるのか分かるのよ。」

「能力だ？ねえよ。そんなモン。たとえあったとしても、俺は関わらない。」

ん？2号が走ってきてんな。とろいな。あれで全力か？まあ、何でも構わんがな。
2号が見えたとたん、ナミがうるさく言わなくなった。2号には聞かせたくないってか？どうでもいいが、しつこく言われなくなって助かったかな。まあ、それ以上に2号がうるさくならなければ、だげど。

第3話　話が進まない（後書き）

ナミ「どうでもいいことばっかりで全然話すすまないじゃない。いったいいつになったら本編に入るのよ？ていうか、先のこと考えてんの？」

牙蓮「本当、全然進まないな。まあ、多分次で本編に入るだろ？で、先のことだが、前に言ったろ？全然考えてないって。でも、最近色々ねたが浮かんできてな。A-Sまでの大まかな話はなんとなく出来てきた。」

ナミ「へ～、凄いじゃない。」

牙蓮「いや、頭の中にあるだけで実際に書けるかどうか・・・。もう一個のほうも話は頭の中で出来上がってるんだが文章にするのにてこずって、全然出来ないんだよ。それにあくまで大まかな話だ。細かいのは全く考えてない。行き当たりばったりだ。」

セツ「このまま本編に入らなくていい。そうすれば面倒ごとも起こらんし楽だろ。」

ナミ「あんたね・・・。」

牙蓮「お気に入りに登録してくださった御方や感想まで書いて下さった御方もいるんだ。そういうわけには行かない。
　そうそう、セツの指から毒素は出ませんよ。」

セ・ナ「「・・・・・・・」」

セツ「こんな駄文をお気に入りや感想を書くやつがいるとはな。驚きだ。」

ナミ「ちょっと、セツ。せっかくのご好意よ。そんな言い方は無いでしょ。全く、うれしいんなら素直にお礼を言いなさいよ。読んでくれる人いなくなっちゃうわよ。」

セツ「俺の知ったことじゃない。」

牙蓮「（完璧に自分の言葉スルーか。まあいいけど）
　次回はできればもう一個のほうを先に投稿したいと思っているのでいつになるかわかりません。といっても、いつもそのつもりでやっていて先にこちらが完成してしまうので、またこちらが先になるかもしれませんが。申し訳ありません。盆明けまでにはもう一個のほうも更新したいとは思っているのですが、どうなることやら。」

ナミ「んじゃ、次回もよろしくね。」

セツ「まあ、期待せずに待て。」

第４話　キャラ設定はいらないよね？

「井上峻です。今日一日よろしくお願いします。」

「恭也だ。」

「もう、恭ちゃんったら。ごめんね。私は美由紀。よろしくね。」

あれから時間がたち、晩飯の時間。高町家の残りの家族と挨拶をしたのだが・・・。こいつらの親、本当にいったい何歳だ？恭也って人は大学生らしいし、美由紀って人は高校生だそうだ。実の親子だとしたら、どんなに早く考えても３５はすぎてるよな？４０すぎで普通位か。もっと上でもおかしくない。全くもってそうは見えん。ま、何でもいいか。俺には関係ないことだしな。

で、まあ、色々と質問されるわけなんだが、正直うざい。今までどこに住んでたとか、趣味は何だとか、ナミと２号のことどう思ってるのかとか、他にも色々、聞いてどうすんだよ？ってことばかり聞いてきやがる。最後の質問されたとき、父親と兄が凄い目つきでこっちを睨んで来るし。そろそろ我慢の限界を感じたのから、適当な理由をつけて俺にあてがわれた部屋に行こうと思ったとき、父親が今までとは違い、真剣な声で質問をしてきたのでなんとなくその場にとどまり、質問に答えることにした。

「峻君。君はユキのことをナミと呼んでいるようだが、それはどうしてだね？ユキはユキで峻君のことをセツと呼ぶみたいだし。二人はどこかで会ったことがあるのかい？」

はぁ？何、そんなことをそんな真剣な面して聞いてきてんだよ。誰

が誰をどう呼ぼうと自由だろ？
つーか、ばれてんだな。ナミが俺のことセツって呼んでること。あいつも無意味な努力してんだな。まあ、2号あたりがチクッたんだろうがな。

「別にたいした理由は無いですよ。ただ、なんとなくそう呼びたかっただけですよ。」

本当の事言っても信じないだろうしな。

「はぁ、ばれちゃったんだ。そのこと。まあ、理由はセツと同じ感じかな。」

「そんなことは無いだろう。特にユキはあれだけ嫌がってた名前を他の人の呼び名にするくらいだ。何かあるんだろう？」

こいつ、自分が納得する理由が来るまで聞き続けるつもりだ。腹立つな。俺が嫌いなタイプだ。ったく、しょうがない。いや、寧ろ好都合か？

「分かった。本当のこと話しますよ。信じるかどうかはあんたらに任せます。まあ、それで信じないって言われても他に理由は無いですけどね。」

「ちょ！セツ！」

「そうか。ありがとう。信じるかどうかは聞いてから決める。話してくれ。」

「だが、それを話したら俺はあんたらとの接し方を他の連中と一緒

にする。それでもかまわないな？」

「ん？それは自然体で接してくれるということかな。それなら寧ろ歓迎するよ。」

よっしゃー！これで自由になれる♪

「まず、俺は井上峻じゃない。」

「「「「え？」」」」

いきなりのカミングアウトにナミ以外のやつら、すっげー間抜けな顔してるよ。ナミはナミで、ホントにやりやがったよこいつ。見たいな顔してるし。

「この体自体は井上峻ってやつもモンかもしれないけど、魂っていうのか？精神っていうのか？その辺はよく分からないけど、今この体を動かしているのは井上峻じゃなくて、加藤雪人だ。加藤雪人、それが俺の名前だ。で、ナミってのは俺の親友の名前だ。そこにいる、ユキって言ったか？そいつと会って、話してたら俺と似たような感じでナミだってことが分かったからナミって呼んでるだけだ。俺の話はこれで終りだ。まあ、ナミの方が詳しいこと知ってるだろうから、あとはナミの聞いてくれ。

んじゃ、約束通り、素に戻らせてもらう。まず始めに、今日泊めてもらうことには感謝する。けど、必要以上に俺に関わるな。飯もいいや。風呂と寝床だけ貸してもらえれば。まあ、風呂は借りたからもういいけどな。じゃ、俺は部屋に行くから。おやすみ～。」

あ～、しゃべった。久しぶりかな？こんなにしゃべったの。ん？いや、昼間ももこれくらい力説してたか？まあいいや、そんなこと。

さてと、寝るか？まだ早いな。どーすっか？やることないし・・・。

ｓｉｄｅナミ

あの馬鹿、本当に言っちゃった。しかも私まで巻き込んで。面倒そうなこと私に押し付けるとか、あいつらしいといえばあいつらしいけど、むかつくわね。
皆、まだ頭がついていってないのか、何も言葉発しないし。面倒になる前に私も逃げようかな？

「ユキ、彼が言ってたことは本当なのか？」

あ、遅かった。あ～あ、考えてないでさっさと逃げればよかった。いまさら思ってもしょうがないか。

「信じてるの？」

あれを信じるとか、普通の人なら無理でしょ？

「・・・・・信じ難い話だな。」

あ、普通の答えだ。よかった？のかな？

「だが、彼が嘘をついているようには見えない。」

ふーん。ま、いいか。本当の事言っても。ここで嘘つくのもなんか嫌だし。

「本当よ。」

さっきほどじゃないけど、皆驚いてるわね。無理ないか。

「あ、でも、私はセツとは違って高町雪でもあるわ。」

「ん？それはどういうことだ？」

「セツについては私もよく知らないけど、昨日突然今の体になってたって言ってたの。だから井上峻じゃないって言ったんだと思う。でも私は生まれてきた時から高町雪として生きてきた。理由は分からないけど、新井菜美の記憶を持ってたけどね。」

うまく言えないな。ちゃんと通じたかな？

「そうか・・・。わかった。全部信じよう。」

「そうね。」

わ！父さんも母さんも信じちゃった！いいのかな？兄さんや姉さんも頷いてるし。信じたってことよね。なのはは・・・信じる以前に全然理解できてないみたい。あとで説明しとこうかな？どうしよっか。

「ユキ、彼、えーっと・・・」

セツ呼び方、迷ってるのかな。

「峻でいいんじゃない？」

「ああ、そうだな。峻君を呼んできてくれ。少し話がしたいんでね。」

「止めといた方がいいわよ。あいつ、自分が気を許してる人以外に自分の時間を費やすこと嫌ってるから。いままでよく我慢してたな、ってずっと思ってたのよ。」

本当、学校でいつ暴れだしてもいいくらいだと思ってたしね。ここでは一応感謝の気持ちもあってかあいつにしては普通に接してたけど、素に戻るって約束したし、もう無理よね。

ｓｉｄｅセツ

駄目だ。暇すぎる。しょうがない、少し早いが寝るか・・・。

「ねえ、聞こえる？」

ん？なんか聞こえたか？

「ねえ！聞こえてるんでしょ。」

うるせえな。人が寝てんのに、なんで邪魔するやつばっかなんだよ。目を開けて、声のするほうを見たんだが・・・、ここ、どこだ？俺、ナミの家で寝たんだよな。何でこんな真っ白で何もないとこにいるんだ？夢か？夢にしちゃ、随分はっきりしてんな。まあ、現実か？って聞かれたら速攻否定出来る気がすっけどな。

「あ！やっと気がついた。ねえ、お願いがあるんだけど。」

あ？誰だこいつ。金髪のガキ。今の俺と歳は大して変わらねえか。金髪の知り合い？炎か？駄目だ。顔、覚えてない。とりあえず炎だとして、何であいつが夢に出てくんだよ。まあ、どうでもいいか。んなことより、いきなりお願いとはな。

「嫌だ。」

何故、俺がテメェの言うことを聞かなきゃいけねえんだよ。

「即答！？それも否定！なんで！いいじゃない。少し位。」

「うるせえ。つーか、お前、炎だろ？だったら俺じゃなくてナミに頼みゃいいだろ。」

「え？炎？それ人の名前なの？違うよ。私はアリシア。アリシア・テスタロッサだよ。」

アリシア・テスタロッサ？そんな知り合いいたっけ？つーか、長いな、名前。なんかいいのあるか？テスタロッサだから・・・。

［テスタロッサといったら、テッサしかないだろう］

ん？誰だ？今言ったやつ。あいつ以外、他に誰もいないな。まあいいか。テッサか、ん～、駄目だな。特に理由は無いが、なんとなく、声の主のいいなりになるのはむかつく。

あ～！考えんの面倒だ。何でもいいや。テッサ以外なら。まあ、呼ぶことも無いだろけどな。

「ねえ、私のお願い聞いてよ！ねえ、お願いだからさ！」

ったく、うっせーな。何で夢ん中でまでむかつかなきゃいけねえんだよ。もういい。無視して寝る。いや、寝てるから夢見てんだろうけど、あー！そんなことどうでもいい。寝るったら寝る。夢ん中だろうがなんだろうが俺は寝る。

夢のなのかで寝ると決めて横になり、目をつぶったはずなんだけどな・・・。起きちゃった。さっきみたいに変な場所でもない。ナミの家の俺にあてがわれた部屋だ。おかしい。寝ると決めたのに何で起きる？寝足んねぇ。今何時だ？・・・、４時？えっと、確か寝たの８時半過ぎだから７時間くらい寝てたんだよな。なんだろ？ぜんぜん寝た気がしない。まあ、いつもなら二度寝する時間だからいいんだけど、全く寝られそうにも無い。わけわからん。寝足りないのに寝られない。どうしろと。

「あ～、考えてもしょうがねぇ。せっかく早く起きたんだ。久しぶりに走りに行くか。」

最近仕事を理由にサボって全然走ってなかったからな。ちょうどいいか。

で、着替えて走りに行ったんだよ。久しぶりの上に、ガキの体だから、１時間で１０キロは無理かな～とか思いながら軽く流してたんだけどさ、全く疲れない。つーか、１時間で１０キロ？なにそれ？子供の遊び？みたいな感じだよ。きちんと測ったわけじゃないから正確な距離じゃないけど、１時間で２０キロは走ったよ。それも流しながら走ってるのに。どういう鍛え方したらこうなるの？凄いね、井上峻の体。けど、軽くショックだよ。俺、加藤雪人の体の時に頑

張っても１０キロ３０分切れなかったんだよ。ベストが３０分０４秒０８だよ。なのに、井上峻君、軽く流しただけでその記録より早く走れるんだよ。さっき軽くって言ったけど、考えてたらすっげーショックだ。

で、時間も有り余ってたから、ついでに短距離も計ってみた。まあ、自分でストップウォッチもって計っただけだから正確さも全く無いし、公式記録としても残らないけどな。

１００ｍ　６秒９１　　２００ｍ　１１秒７０　　４００ｍ　２０秒００

なにこれ？全部世界記録大幅更新だよ。いや、ありえないでしょ、これは。人間の限界超えてるよ。手足の短い今の俺でこれだよ。成長したらどうなんの？他の人もこれくらいで走るのか？あ、いや、２号はかなり鈍足だったな。まあ、それはいいや。他の連中もこれ位で走るんなら何の問題もないけど、違うんならやばいな。誰かにばれたら、騒がれる。それだけは御免だ。後で調べとくか・・・。よし、そろそろ帰るか。もうすぐ６時半だし。あ！どうすっか、風呂、もういらねえって言ったよな。せめてシャワーは浴びたいよな。勝手に借りるか。大丈夫だろう。

第4話　キャラ設定はいらないよね？（後書き）

牙蓮「遅くなり、ごめんなさい。さらに、前回、原作に入るような事言ってたのに、入れなくて申し訳ありません。」

セツ「へ、愚かな奴め。」

ナミ「本当にどうしようもないわね。また余計なことばっかり書いてるし。」

牙蓮「そうなんだよな。けど書きたかったんだからしょうがないじゃん。それに重要なこともあったろ。」

セツ「俺の運動能力の事か？」

ナミ「いや、違うでしょ。」

牙蓮「はっはっは。そのことに決まっているじゃないか。」

ナミ「え！？アリシアのことじゃなかったの！？」

牙蓮「いや、さっきの冗談だから。セツの運動能力はさほど重要じゃないつもり。で、アリシアは結構重要になる予定だ。まあ、当たり前のことか。」

ナミ「そ、よかった。それで、いつになったら原作に入るのよ。」

牙蓮「一応、今回セツが走っているときに、なのははユーノの夢？

を見ているってことになってる。だから入ってるといえば入ってる。
」

セツ「俺を巻き込むなよ。」

ナミ「それは無理でしょ。」

牙蓮「いや、まだどうしようか悩んでる。まあ、その辺は次回ではっきりすると思う。というわけで、次回もよろしくお願いします。」

ナミ「いつものことだけど、何時になるか分かんないんだけどね。御免ね。」

セツ「そういうことだ。こんな駄作、待つだけ無駄だぞ。」

第5話　ようやく、原作介入！？（前書き）

毎度のことながら、遅くなり申し訳ありません。

ついでに言うと、今、時間があまり無く、誤字脱字の確認があまり出来ませんでしたので、結構あるかもしれません。本当にごめんなさい。

第5話　ようやく、原作介入！？

あの後、無事（？）にシャワーを浴び、学校へ行き、今は放課後。この世界での陸上の記録等を調べるため、図書館に行く予定だ。

「あ！セツどこ行くのよ！」

ナミに見つかった。何故？誰にも見つからないようにさっさと教室出たのに、何で前のほうにいるんだよ。俺より早く教室から出てたのか？まあ、そんなことどうでもいいか。

「図書館だよ。調べたいことあるからな。」

ナミだし、正直に答えとくか。けど、ついてくるとか言われたら面倒だな。

「っ！ふ～ん。ま、いっか。
けど、ちゃんと家に帰ってくるのよ。」

何だ？今の反応。何か企んだか？いや、それより、お前の家に帰る？

「は？何で？」

「何で？って、昨日言ったでしょ。あんたの母親、いつ帰って来るか分からないって。帰ってくるまで私んちに泊まるのよ。」

は？なんだよそれ。めんどくせぇな。よし、

「嫌だ。」

「はっ、言うと思った。けど、勝手なことすると、拳骨１００発じゃなかったの？それが嫌で昨日家に泊まったんでしょう。」

確かにそうだが

「知るかよ。帰って来もしないやつに怯えていつまでもそんな面倒な事してられっかよ。お前んち泊まると、自由に出来ないからな。一人で自分ちにいたほうがかなりマシだ。つーわけで、今日は自分ちに帰っから。」

やっぱりなというか呆れたというか、そんな感じの顔だが、どこか嬉しそうなナミはほっぽといて、さっさと図書館行くか。後ろから何か色々言ってるけど、まあ、気にしない。

そして図書館。いやー、ここまで来るのに苦労した。勢いよく学校飛び出したのはよかったけど、俺、図書館の場所知らなかったからな。適当にさまよって、ようやくたどり着いたよ。

ま、そんなことはさておき、さっさと調べるか。

で、陸上のことだけだとせっかく来たのにもったいないような気がするから、陸上の本のほかに、柔道、水泳、あとなんとなくついでに野球の本を持って、空いている席に付く。柔道と水泳は昔趣味でやってたものだ。今でも機会があればやりたいとは思っているけど、まあ、無いだろう。野球は中学の頃野球部だったんだよな。今思えば本当に謎だ。団体行動嫌いなのに、チームスポーツの野球だもんな。なに考えてたんだろうな。

「ねえ、君。隣、ええか？」

なんか聞こえたけど、とりあえず無視かな。

「私は、八神はやてや。よろしくな。」

・・・・。何だこいつ。質問しといて答えを聞かずに行動したがった。だったらはなから聞くんじゃねえよ。んで、なんとなくそいつのほうを見たんだが

「トっ！」

「と？」

「トビタヌキ！！」

いや、全然似てないんだけどさ。なんかよく分からんが、そう言わなければならないような気がして。せっかくだからこいつはトビタヌキで決定だな。

「トビタヌキ？なんや？それ。」

「気にするな。今からあんたの名前ってだけだ。
で、なんの用だ。」

いや、おかしいだろ。何を聞いてんだ俺は？ここは無視するとこだろ。

「私の名前って、私ははやてや。さっき名乗ったばかりやんか。」

「細かいことは気にすんな。
じゃ、俺はもう行く。」

そう言って、図書館から出る。トビタヌキが何か言ってるけど、気にしたら負けだ。
最低限調べたいことは調べられたからまあいいか。ま、結構ショックな結果だけどな。
今の俺の運動能力は異常だと分かった。今まで俺がいた世界とここの世界、基本的に違いが無い。世界記録や高校記録、学校とかでやる体力テストの平均等どれを見てもほとんど変わらない。
ということで、俺が陸上の大会に出るのは不可能となった。いや、大会以前に普段運動するのにも気を使わないと騒がれそうだ。

まぁ、大会とに出られなくても、俺がどこまで速くなれるのか徹底的に鍛えてみるけどな。どこまで速くなれるか、ちょっと楽しみだな。どうせ学校くらいしかやること無いんだから、毎日走れそうだ。
よし、今夜から開始！！

ｓｉｄｅはやて

今日、珍しく図書館で同い年くらいの男の子を見つけたんや。めったに無いことやから、勇気を出して声をかけたのに・・・。

「ねえ、君。隣、ええか？」

って聞いたんに、何の反応もしてくれへん。せやから勝手に座って自己紹介したのに、今度は私の顔を一目見て、少し驚いた顔をしたと思ったら

「トビタヌキ！！」

よく分からんこと言われた。タヌキっちゅうんから、タヌキの仲間なんかも知れへんけど、飛ぶタヌキなんて私しらへんな。それがなんなのか聞いたら、

「気にするな。今からあんたの名前ってだけだ。
で、なんの用だ。」

な、なに言うとんのや？この人。私の名前ははやてやって言ったばっかりやん。そうに文句言ったら、

「細かいことは気にすんな。
じゃ、俺はもう行く。」

とか言って、帰ってもうた。
なんなんやあいつ！自分勝手なことばっかりして、自分の名前も言わずに帰ってもうた。人がせっかく勇気出したっちゅうんに。
今度あったら礼儀っちゅうもんを、徹底的に叩き込んでやるで、覚悟しとき！

ｓｉｄｅナミ

学校が終わったら、セツが誰にもばれないようにそそくさと帰ろうとしているのを見つけて、私はそれより先に教室を出て、待ち伏せをした。ま、待ち伏せる意味は大して無いんだけどね。
どこに行くか聞いたら、図書館だと言われた。お！これははやてと会うかな。・・・でも、こいつじゃ仲良くなることは無いか。つま

んないな。

あ～あ、今日、原作一話が始まるって言うのに、今のこいつを関わらせるのは私には無理だよね。出来るだけ早く巻き込めるようにしたいけど、どうすればいいかな？
あんまりセツの事ばっかり考えてもしょうがないか。私、ラムダ・ドライバを一回しか使えないからどういう立ち回りをするかも考えないとだし。なのはのサポートに回るつもりだけど、それはユーノがいるし。ま、なるようになるよね。

そして夜。
ユーノの念話が聞こえ、なのはと共に声の元に走り出した。
動物病院の近くに着くと、フェレットがいた。当たり前か。

「フェレットさん！」

なのはがフェレットを抱く抱えたとき、なんて言っていいのかわからない化け物が現れた。

「お願いします。力を貸してください。僕一人ではどうすることも出来ない。君には資質がある。お願い、僕に少しだけ力を貸して。」

「しゃべった！」

「なのは！驚いてる場合じゃないでしょ！
私がどうにか時間稼ぐから、そのフェレットの話を聞いて！早く！」

私がそういうと、なのはは驚いた顔をして

「お姉ちゃん！」

叫んだ。叫ぶ暇があったら早く話を聞いてよ。そう思っているとフェレットが

「君、お願いだ。僕に力を貸してくれれば、あの人も助けられる。だから！」

といい、渋々、なのはもそれの応じた。

よし、私もやるか。初めての実戦だ。昔喧嘩ならしょっちゅうやってたけど、そんなのとはレベルが違うわよね。

そんな無駄なことを考えながら、自分の腕時計に向かって

「アル！行くわよ！」

と声をかけた。初めてだ。今まで一度も話しかけたことは無い。今更思うが、何故今まで発動することを確認しなかったのだろう。そして何故今、そんなことを考えたのか分からない。

「声紋チェック開始。姓名、階級、認識番号を。」

え？う、嘘。これって、宗介が始めて乗ったときの言葉？

「えっと、高町雪。階級は・・・。階級！？そんなの、あ～！それどころじゃないの。ラムダ・ドライバ、使えるんでしょ。はやく起動して。」

「ラムダ・ドライバの駆動には、“ＳＧＴ（サージェント）サガラ”の搭乗が必要です。」

え？な、なにそれ。聞いてないわよ。ていうか、フルメタの原作通りじゃない。大体搭乗って、あんた腕時計じゃない。乗れるやつがいるかっての。何で原作のアルのＡＩが付いてるのよ。あの馬鹿神が！私にどうしろっていうのよ。

あぁ、もうなに言ってるのか分からなくなってきた。あれ、言ってたっけ？声出してないわよね？じゃあ言ってないじゃない。思ってるだけよ。って、私はいったい何を考えてるの？落ち着きなさい。私。冷静に考え・・る場合じゃ無い。どどど、どうする？

・・・・・諦めよう。時間は稼げたと思うし、なのはは助かるだろう。うん、随分長い人生だったな。ん？長くは無いか。ま、転生っぽいことも出来たし、楽しめたから良しとしよう。無理だろうけど、これから先、セツがなのはのこと助けてくれれば、言うことないんだけどな。

諦めて目をつぶってから、数秒後、思っていたより弱い衝撃が来た。目をつぶってるからなんとなくしか分からないけど、多分空中に吹っ飛ばされた様な感じがしたんだけど、地面に落ちたり、何かにぶつかったりしたときの衝撃がなんかとてもやわらかかった。もうすぐ死ぬから、感覚おかしくなったのかな？

「おい、いつまで寝てんだよ。」

え？・・・セツの、声・・？！

ｓｉｄｅセツ

あの後すぐに走り始めてもよかったんだけど、そうすると人目につ

きそうだから、夜まで待つ。
そしてようやく夜になり、走り始めた。
最初はアップがてら軽く流した。といっても、昔の俺の全力と同等か、それ以上の速さで走っている。１５分くらいして、準備運動やストレッチとかをして、今度はビルドアップだ。徐々にスピードを上げていく練習だ。それを１時間くらいやった。で、その後短い距離のダッシュをしてから最後にＴ．Ｔだ。少し練習量が少ない気がするけど初日だしいいだろう。
集中しろ。意識して良いのはチェックポイントとゴールだけだ。タイムは気にするな。終わってから確認すればいい。余計なことは考えるな。

・・・よし、スタート！

第３チェックポイントあたりで、一瞬、集中が途切れた。理由は、視界にナミが入ったからだ。いや、それは言い訳か。何があっても途切らせたらいけなかったのに。多分、走ってる最中にもう一度完璧に集中することは俺には無理だ。
たっく、ナミの野郎、こんな時間になにやってやがんだよ。そう思い、足を止め、ナミのほうを見た。

「はぁ？」

思わず、とてつもなく間抜けな声が出た。いや、なにあれ？化け物？・・・だよな？なんで？
いやいやいや、ちょっと待て、このアニメ、魔法少女って言ってたよな？魔法少女って言ったら、コンパクトとか鏡とかに呪文言っていろんなモンに化けていたずらするアニメじゃないのか？なんだよ

あれは。アーゆうのは男の子向けのヒーロー物のアニメとかに出てくるもんだろ。なんで、女の子向けであろう、魔法少女物に出てきてんだよ。おかしいだろ。
で、なんであいつらはそんなのと向かい合ってんだよ。ま、まぁ、ナミはこうなること知ってたから、大して驚かないだろうけど、2号は違うだろ？ただの小3のガキがなんで普通にしてられんだ？正直、俺だって怖いし、今すぐ逃げ出したいぞ。つーか、ナミのやつ、こんなのに俺を巻き込もうとしてたのか。俺にどうしろってんだよ。あんなのと戦えってか？無理言うなよ。

ん？あ、あいつ、何でじっとしてんだ？お、おい、化け物もう近くまで来てんぞ。は？何？目ぇ、つぶってんぞ。馬鹿か。
そう思った瞬間、俺の意思とは関係なく、体が勝手に動いた。ナミに向かって走り出す。
やばい、どうすればいい？ナミをかばって攻撃を受けるか？いや、痛そうだから却下。ナミを突き飛ばす？後で文句言われそうだし、それだと、俺が攻撃受けそうだから却下。考えがまとまらないのに、もうナミのすぐそばまで来てるし。足が速いのが裏目に出たか？あぁ！もういい。出来るかわかんないけど、ナミに向かって飛び込み前回り受身だ。ナミに飛びついて、そのまま抱きかかえ、前回り受身、まぁ、でんぐり返しのようなものだ。

・・・・・どうにか成功。よかった。やべ、すっげー安心してる俺がいる。まだ安心できないよな？ったく、ナミの野郎、いまだに目ぇつぶってやがる。なんか腹立つな。

「おい、いつまで寝てんだよ。」

「え？セ、セツ？な、何で？あれ？夢？」

「テメェは馬鹿か！何喧嘩相手の前で目ぇ閉じてぼけっと突っ立ってんだよ。死ぬ気か！」

「え？あ、ご、ごめん。」

なにが、ごめんだ。ふざけやがって。

「じゃあな。喧嘩もいいけど、程々にしとけよ。」

そういい、ナミに背をむけ歩き出す。

「え、あ、ちょ、ちょっと待って。」

「ちっ、なんだよ。」

「何で帰るのよ。手伝ってくれてもいいじゃない。」

「何で俺がそんなことしなくちゃいけねぇんだよ。お前、高校はいるまで俺より、力も体力も足の速さも上だし、喧嘩だって強かったじゃん。俺がいなくっても大丈夫だろ。」

「いつの話してんのよ。今はもうあんたのほうが強いじゃない。それに、あんな化け物よ。何が起こるかわからないじゃない。」

なんか、すげー腹立ってきた。もう限だな。

「ふざけんじゃねえ！大体なんなんだよあれは！お前、魔法少女だって言ってたよな？何であんな化けモンが出てくんだよ。魔法少女って言ったらコンパクトとかで化けていたずらとかするモンだろうが。」

「何言ってんのよ。あんたいつの時代の人間？そんな昔のアニメ、あんたが知ってることに驚きよ。それにあれくらいの化け物ならいろんなアニメに出てくるじゃない！馬鹿じゃないの！」

「んだと！今のアニメにどんなモンが出てくるかなんて俺が知ってるわけ無いだろうが！いろんなアニメに出てくるんなら対処法知ってんだろ。だったらお前がやればいいだろ。」

「出来てたらやってるわよ。出来ないから何もできずに突っ立てたんじゃない。そんなこともわかんないの？」

「お、お姉ちゃん、井上君、危ない！」

ん？2号の声か。その声で気づいたんだが、化け物がすでに近くに来ていて、攻撃しようとしてるな。今、こいつと話してんだ、

「「話の邪魔！すんじゃ・・・ねぇぇぇ！！」」

俺とナミが同時に同じことを叫び、化け物を殴りつける。化け物は俺らの拳を受け、数m吹っ飛んだ。あれ？こいつ全然強くないのか？怖がってそんしたな。

「ラムダ・ドライバの駆動を確認。」

ん？なんだ、今の機械的な声は？

「え！本当？」

おいおい、しゃべる玩具の次は、しゃべる腕時計ですか。やってら

んねぇな。

なんかしらけたな。こいつと口論ももういい、帰ろ。

第5話　ようやく、原作介入！？（後書き）

牙蓮「すみません。この間の日曜まで完璧に放置してました。ごめんなさい。

　あと、知らない人がいるかもしれないので一応説明しておきますが、文中に出てきた、“宗介”と“サガラ”はフルメタル・パニックの主人公の相良宗介のことです。知っていましたら、余計なことをすみません。本編に名前以外出ることはありません。」

ナミ「・・・随分やりたいほうだいやったわね。」

牙蓮「まあな。やりすぎたか？」

セツ「何で俺を巻き込んでんだ。ふざけるな！」

牙蓮「落ち着けって。いずれはそうなるって分かってたろ。諦めろ。」

セツ「っく、このクソ野郎が。絶対後でぶっ飛ばす。」

ナミ「はやて、出てきたわね。早すぎなんじゃない？」

牙蓮「ああ、気にすんな。後悔してんだ。あそこ書くのに一番時間かかってんだ。なのにたいして長くないし、全然よくないんだよ。」

セツ「あいつも、原作関係者か・・・。だったら消せばいいだろ。」

牙蓮「いや～、せっかく書いたんだから、まぁいいかと思ってな。」

ナミ「ま、私はかまわないけど。それより次回はもっと早くできないの？」

牙蓮「・・・。すまん。なんとも言えない。」

セツ「本当に駄目なやつだな。」

ナミ「本当にね。ま、次回もいつになるかわからないけど、よろしくね。」

牙蓮「本当に申し訳ありません。出来るだけ早くはしたいと思っているので、どうぞ、これからもよろしくお願いします。」

第6話　ようやく完成。ごめんなさい。（前書き）

まず、とてつもなく遅くなってしまい、申し訳ありません。

さらに、短いです。お許しください。

第6話　ようやく完成。ごめんなさい。

ｓｉｄｅナミ

「ラムダ・ドライバの駆動を確認。」

「え！本当？」

なんで？さっき無理って言ってたわよね？

「エラー、エラー、エラー、否定（ネガティブ）、否定、否定、エラー、エラー・・・・」

な、なに？なんなのよ。

！？いきなり雑音が鳴ったと思ったら今度は一切何にも言わなくなちゃった。壊れたのかな？それは困るけど・・・。

「ア、アル？」

「・・・・・・」

返事が無い。ただの屍のようだ。って、そうじゃないでしょ。どうしよう。

「リリカル・マジカル。封印すべきは忌まわしき器、ジュエルシード！

ジュエルシード！封印！」

「シーリングモード、セットアップ。スタンド・バイ・レディ。」

「ジュエルシード　シリアル？？？！封印！！」

「シーリーング。」

あ、封印、出来たんだ。というか、すっかり忘れてた。
ん？あれ？セツがいない？あいつ、勝手に帰ったな。ったく、どうしようもないやつなんだから。
そんなことより、早く逃げなきゃね。面倒なことになるのは嫌だし。

「なのは！とりあえずここから離れるわよ。」

ｓｉｄｅセツ

ったく、あいつらのせいで、結局練習（まぁ、残りはＴＴだけだったけど）出来なかったじゃねえかよ。
それに、あんな化け物まで出てくるし、最悪だな。これからは本当にもう一切関わりたくねえな。
とりあえず、今日はもう寝るか。

「・・・・・・またここか。んでお前か。」

何で最近は俺の眠りを妨げるやつばっかなんだ？親といい、クラスの馬鹿連中といい、こいつといい、先生からも邪魔されたしな。ま、最後のは授業中だからしょうがないかもしれないけど。

「ごめんね。でも、どうしても「嫌だ。」・・・、なんで？話しくらい聞いてくれてもいいじゃないですか。」

「めんどい。ナミや2号のほうに行けばいくらでも聞いてくれんだろ。そっちをあたれ。」

「無理なの。私にもよく分からないんだけど、君以外のところに来られないの。だから、お願い。」

「知るか。大体なんだよ。俺のところにしかこれないとか。つーか夢の中に出てくんじゃねえよ。直接会いにいきゃいいじゃねえかよ。俺はもう寝る。二度と出てくんじゃねーぞ。」

もう寝よう。寝てるはずなんだけどな、今。ま、細かいことは気にしない。

「聞いてもらえるまで、何度でも出てくるからね！」

なんか面倒な事いってるけど、無視。あんなの相手にしてられるかよ。

ッ、あ～、クソッ。やっぱりか。起きたよ。なんとなく予想はしてたけどな。

時間的にはそこそこ寝てるはずなんだけど、ぜんぜん寝た気がしない。今から寝られる気もしないし。まあいいや。学校で昼寝でもすれば、少しはマシになるだろう。

そして、学校。まだ1時間目も始まってないが、寝よう。家では全

く眠気がしなかったのに、ここに来たらすっげー眠くなってきた。
ま、もともと学校なんてそんな感じのところだしな。学校＝昼寝の場。

「セツ、おはよう。」

ナミか・・・。
また邪魔するのか。俺の睡眠を。何故皆して俺の安眠妨害をする？

「・・・おはようさん。何のようだ。俺は今から寝るんだ。邪魔すんな。」

「は？何言ってんの、あんた。学校は寝るところじゃないでしょ。まだ、始まってすらないのに。」

「俺の勝手だ。今更学校なんか来たくもないのに来てんだ。ここにいるだけマシだと思え。
あ、あと、学校であんまり俺に近づくな。」

「何でよ。」

「お前が来ると、2号や炎、式部が来んだろ。そいつらが来ると、男連中がうるさくなる。ガキ相手だからモノすっげー我慢してぶっ飛ばしたい衝動を抑えてんだ。お前なら分かってんだろ。」

あ、ちなみに分かると思おうけど（無理）一応言っとくと式部ってのは、あ～・・・、いたろ？髪の毛の紫のやつ。名前忘れた。というより俺の中であいつの名前は紫式部だ。だから式部。つーか、あれはありえないよな。炎の金髪は地毛？だと思うからいいとして、式部は、絶対地毛じゃないだろ。あれ。よく学校が許可してんな。

ま、俺なら許可が下りたとしても、紫は無いな。どういう神経してんだか。っと、話がそれたな。

「あ、なるほどね。ま、我慢出来るんならいいじゃない。あんたがが今まで我慢できてたのには、流石に驚いてたけどね。もう、いつ爆発してもおかしくないって思ってたし。」

「テメー、人事だと思いやがって。」

こいつ、悪戯が成功したときみたいな笑み浮かべやがって。

「だって人事じゃない。けど、今回は大丈夫よ。なのはにアリサとすずかの足止め頼んどいたから、多分来ないわ。

ま、そんなことはおいといて、少しだけだから我慢してね。大事な話なの。ちょっと外、出よ。」

「昨日の夜のことに関係してんなら遠慮する。」

「それに関してのことね。って、逃げるな。話を聞け！」

逃げて当然だろ？そんな話おとなしく聞きたがるやつがいるかっての。

「ったく、嫌だっつただろうが。しゃぁねぇ、聞いてやるからさっさと話せ。」

そう言い、廊下に出る。

「昨日、変な化け物に襲われたでしょ。」

「変じゃない化け物ってのはどんなんだ？」

「黙らっしゃい。」

「ふん。お前が殴り飛ばしたやつだろ。それがどうした。」

「私がって、あんたも一緒に殴ったじゃない。私だけでやったみたいに言わないでよ。」

「いや、少し考えれば分かんだろ？ただのガキが殴ったって、あんなにぶっとばねぇよ。あの後すぐ、お前の腕時計がラムなんとやらとか言ってたろ？それの力じゃねえの？」

「へ、へ～なかなか鋭いじゃない。」

お！正解らしいな。

「なら、俺が関わる必要ないだろ。お前でどうにかできたんだ。」

「そ、それが、その・・・ね？」

「ね？っつわれたってわかんねえよ。」

「あの後、壊れたわけじゃないと思うんだけど、しゃべん無くなっちゃったのよ。あれが無いとラムダ・ドライバ使えないから・・・。」

ぶっ。くっくくく。壊してやんの。馬鹿じゃねえの。あ、やべ笑うの我慢できないかも。何で俺こんなに笑ってんだ？

「そ、そうか。ま、まあ、壊れちまったんならしょうがないな。おとなしく2号に任せておけばいいだろ。あいつが主人公なんだから。」

「ま、まだ壊れたって決まったわけじゃないわよ。多分、大丈夫よ。多分・・・。

そ、それより、あんた、いい加減、デバイスと話してよ。」

さて、席に戻るか。寝る時間が無意味に減る。と思い、ナミに背を向ける。

「だ～、ちょっと待て！大事なことなのよ。

昨日の化け物、魔力を持ったやつのところに現れて襲うの。だからあんたも何か対策しとかないと、次ぎ襲われたとき大変よ。」

・・・。こいつ、今嘘ついたな。理由は知らんがなんとなく分かるんだよな。こいつが嘘つくと。直感というか本能というか、ん？直感と本能って同じようなもんか。

「お前、俺が今なに思ったか分かってんだろ？」

「・・・、うん。私が嘘ついたって思ってるでしょ。」

よく分かってんじゃん。

・・・そこまでして俺にしてほしいこと、ね。

「わ～たよ。話してやるよ。」

「本当！」

うわ、こいつ、いっきに目の色変わりやがった。

「ただし、話だけだ。その後のことは話を聞いてから決めるが・・・、まあ、今と変わらんだろう。」

「うん。それでもいい。今はそれで十分。ありがとう。」

「あ、それと、これで貸し3な。」

「え？な、何でよ。
確か、この世界に来る前までは貸し1よね？何でいっきに2も増えるのよ。」

「昨日の夜だ。お前を助けたから、俺は練習を途中で中断しちまったんだよ。」

「な、そ、そんなの・・・分かったわよ。いいわよ。貸し3ね。
じゃ、今日、あんたん家行くから。」

は？

「何でだよ。」

「何でって、あんたのデバイスと話してみたいじゃん。別にいいでしょ。」

ま、いっか。

「お前だけな。」

「え？」

「2号は呼ぶなよ。絶対。分かってると思うが、お前の親や炎、式部も駄目だ。」

「ああ、それなら大丈夫よ。なのははジュエルシード探しに行くから。」

ジュエルシード？なんだ？何でもいいか。

「じゃ、学校終わったら適当な時間に来いよ。お前が来たらコアドリル出すから。」

「分かった。出来るだけ早めに行くよ。」

別に早めじゃなくもいいんだがな。

「ちょっと、ユキ！井上の家に行くの？私も行くわ。」

はい？なんで？何でお前がいるんだよ？

「アリサ！え？何で？なのはは！」

「お姉ちゃん、ごめん。抑えきれなかった。」

微妙に笑顔で言ってんじゃねぇよ。ふざけやがって。

「でも、私も井上君の家、行きたいの。お姉ちゃんだけずるいの。」

あ～、ムカツク。こいつのじゃべり方。どうにかなんねーのかよ。

「私も行ってみたいかな。」

式部、貴様もか。

「な、なんで皆してこいつん家に行きたがるのよ？
特にアリサ、あんたこいつのこと大嫌いだったじゃない。」

ほう、それはよかった。その調子で、2号と式部も俺のこと嫌いになってくれればありがたいんだが。

「だからよ。こんなやつの家にユキが行ってなんかあったら困るじゃない。」

「私は井上君家に行ってみたいの。お姉ちゃんだけなんて許さないの。」

「私は皆行くみたいだし、行ってみようかなって感じかな。」

面倒なやつらだ。

「駄目だ。テメェらも来んなら、ナミ、お前も来んな。」

「なんでなの？なんでお姉ちゃんはよくて、私達は駄目なの？」

「うるせぇな。あ～！理由なんざ、どうでもいいだろうが。駄目なモンは駄目だ。わ～ったな！
おいナミ、家に来たけりゃ、そいつらどうにかしろ。それができねんなら来んじゃねぇぞ。じゃあな。俺はもう寝る。」

第6話　ようやく完成。ごめんなさい。（後書き）

今回、いつもみたいな雑談は無しで。あれやるとまた時間かかるので。

再び、アリシア出てきました。アリシアのしゃべり方は適当で統一性も多分ありません。あまり気にしないでください。駄目ですかね？

えっと、質問がいくつかあります。

今回、会話ばっかりでしたが、会話以外ももっと増やしたほうがいいですか？

アルのことですが、今回はあまり詳しく書きませんでした。理由は、どの時期のアルにするか悩んでいるからです。自分としては原作の最終巻、『ずっと、スタンド・バイ・ミー（下）』後のアルにしたいのですが、それだと小説を読まずに、アニメや漫画でしかフルメタを知らない方々にネタバレになってしまうと思うので悩んでいます。

どの時期のアルでも特に問題ないのでどの時期のアルがいいかぜひお教え下さい。

あと、文章量なのですが、基本的には５０００文字目安で書いています。今回は３５００程度でしたが・・・。どれくらいがいいですか？

ずっと更新も出来ずに迷惑ばかりかけたのに、こんなこと言って申し訳ありません。

ではまた次回、いつになるかわかりませんが、よろしくお願いしま

す。

第7話　最初に言っておく！今回、か～な～り、短い！（前書き）

まず、いくつか注意事項？見たいな物を。

1、多分かなり無理やりなことやってます。色々文句があるかもしれませんが、出来れば目を瞑ってもらえるとありがたいです。まあ、自分でも納得できてない部分もあるので、文句言われてもしょうがないとは思っていますが。

2、グレンラガン本編を知らないと、ちょっと分からないかもしれないところがあると思います。ご了承ください。

第7話　最初に言っておく！今回、か～な～り、短い！

・・・・・、いい加減にしろよな。なんなんだよ。学校での昼寝にまで出てくんじゃねぇーよ。

「てめぇ、何？そんなに俺に嫌がらせして楽しいか？」

「ごめんなさい。でも！」

「でもじゃねえよ。大体なんで夢？の中に出てくんだよ。直接会いに来りゃいいだろーが。そうすりゃお願いでも何でも聞いてくれるやつがその辺にいんだろ。なんでわざわざ、嫌がってるやつのところにピンポイントで来てんだよ。」

「この前も言ったじゃないですか。あなた以外の所には行けないって。」

「だから、直接会いに行けっつってんだよ。夢ん中じゃなくてよ。」

「無理です。」

「は？何で？」

「私、死んでるんです。」

・・・・・・・・・。はぁ、なんかもう疲れた。

「はいはい、そうですか。だったらおとなしく死体でもやってろ。」

「それが出来れば、私だってあの世でのんびりしたいですよ。」
なんかこいつ、会うたびというか、話すたんびにしゃべり方変わるな。ま、どうでもいいけど。
「お母さんが私を生き返らせようとしてるんです。」
「へ～そりゃ～よかったじゃん。」
かなり棒読みで適当に答えてみる。
「そのために、私の妹を作ったり、その妹を虐待したり、他にも色々な人たちに迷惑かけてるんです。」
「あ～そっ。それで？それを俺に言ってどうすんだ？つーか、誰がんなこと話せっていった？」
「私は死んだんです。理由はどうあれ、私は死にました。」
・・・諦めるか。ま、一通り話せば気が済むだろう。
「死んだ人は死んだ人。その人の為に、今を生きる人たちが苦しんだり、幸せにるのを邪魔していけないんです。」
！！！！！
『死んだ者は死んだものだ。無理に蘇えらせたって、後に続く連中の邪魔になるだけだろう。』
シモンが言った言葉だ。今こいつが言ったのはこれと似たよなもんだよな。

こいつ、今の俺と同じ、否、もう少し下か。それでこの台詞と似たようなこと言えるのかよ。すげーな。
あのときのギミーは確か１２だよな。その歳でも、死者を蘇えらせることを考えた。それに、１部２部のシモンでも方法さえあればカミナを蘇えらせただろうな。そのとき、設定では１４だったか。

「だから、お願いです。お母さんを止めてください。」

・・・断るべきなんだよな。わざわざ自ら面倒事？に首突っ込みたくないしな。それに、生き返らせるって、絶対普通のことじゃない。ってことは、アニメ関係ってことだよな。それは勘弁だな・・・。

「分かった。やってやるよ。」

シモンと同じ考えを持ったやつだしな。少し位ならいいだろう。はぁ、最近、自分から折れること多すぎだな。どうにかしないと、収拾つかなくなるな。俺らしくなくなるし。

にしても、随分と驚いた顔してんな。そこまで意外だったか？・・・意外だろうな。自分でも少し驚いてるくらいだし。

「ありがとうございます！
後、出来れば妹のことも助けてあげてほしいんだけど。いいですか？」

「やだ。メンドイ。人助けは性に合わん。」

調子に乗ってんじゃねーぞ、ガキが。

「何で即答！？

しょうがないか、じゃあ、お母さんのことはお願いね。約束だよ。」

約束か。約束はしたくなかったが、まあいいか。

「ああ。それはやってやるよ。で、どこにいるんだ？お前の親。」

「時の庭園って所。」

「どこだ。」

「う～ん、詳しい場所はわかんない。でも地球じゃないってことは確かだよ。」

こいつ、どこまでふざけてんだ？うん、つーか、俺が馬鹿だった。いったいなに考えてたんだ？シモンと似たような事を言われて、冷静さ失ってたか。大体、何で死んだとかぬかしてる頭のいかれたやつと、訳の分からん空間で会話してしかもそんなやつと約束しちまったんだ？仕舞いにゃ、地球じゃないだと？地球外生命体？宇宙人かよ。

どうやってそんな所行くんだよ。宇宙船に乗るのって、かなり難しいんだろ？当たり前だが俺には絶対無理だろ。

俺は馬鹿か？違うな、大馬鹿だな。俺が大馬鹿だった。

「約束しちまったモンはしょうがない。けどな、出来ないもんは出来ねぇんだ。何かの機会があってもしそこに行けてお前の母親に会えたら止めてやる。」

「もし、その機会がなかったら？」

「諦めろ。
内容をろくに聞かないで約束した俺にも多少責任があるって思ってやる。だからもし機会があればその約束を果たす。それで文句があるんなら、他をあたれ。」

本当にどうかしてるよな、俺。ナミが聞いたらさぞかし驚く状況だな。何せ、こんないかれたやつと無茶な約束して、それを出来れば守るっつってんだもな。ホントに俺らしくない。

「・・・・・・。それでもいいからお願いします。」

随分と長い沈黙付きだな。まぁ、いいか。そんなことより重要なことがある。

「今後無駄に出てきて俺の安眠妨害はすんじゃねぇぞ。」

「え？あっ、それは…。うん気をつ「井上君」。」

ん？なんだ？

「起きなさい。井上君、授業中ですよ。」

誰だ？邪魔すんのは！

「いい加減、早く起きなさい。」

「だぁぁぁ！うっせーな！今大事な話してんだ！邪魔すんじゃねえよ！」

机に突っ伏して寝ていた俺は、勢いよく立ち上がり、そう叫んだ。

叫んですぐにヤベッと思い、目の前にいる人を見ると、今にも怒りが爆発しそうな先生が・・・。

この後のことは、まあ、書くまでもないだろう。

第7話　最初に言っておく！今回、か～な～り、短い！（後書き）

サブタイ通り、短かったと思います。もともと前話に入れる予定のところだけだったので。
この先の話も書くことは決まっているのですが、文章にするのには結構時間がかかりそうなので、とりあえずここまでで投稿しました。
次回も、いつになるかわかりませんが、よろしくお願いします。

第8話　どうにか年内に更新！（前書き）

思いのほか遅くなりました。すみません。

年内にどうにか更新したかったもので、終わりが無理やりです。ごめんなさい。

第8話　どうにか年内に更新！

ｓｉｄｅナミ

予想外な事が起きた！良い方での予想外なのでとてもありがたい限り。

あのセツがもう、デバイスと話をしてくれることになった。原作６話のジュエルシード暴走の時には、手伝ってもらえるようにしておきたいなとか思っていたけど、正直、一生無理なんじゃないかとかも思っていたのよ。

この分だと、かなり早い段階で手伝ってもらえるかも・・・、いや、それは無いわよね。すずかの家に遊びに行くなんてありえないし、温泉なんて一緒に行ってくれるわけがない。となるとやっぱり、６話のときにどうにかして手伝ってもらえるようにするしかないか。

そういえば、あいつ、クロノとあったらどういう反応するかな？私はクロノのことといいやつだと思ってるし結構好きなんだけど、初登場のときのクロノの行動はちょっと許せないのよね。その時は、どんな能力か知らないけどどうせチート能力であろうセツにボコボコにしてもらいたいような気もするけど、セツがフェイトやアルフの為にキレたりとかしないだろうな。ただ、クロノのあの真面目すぎる性格はセツは気に入らないとはずだし。けど、だからといってぶっ飛ばすなんてありえないわよね。多分、クロノのことは空気としてしか見ないだろうな。

と、余計なことたくさん考えたけど、先のことなんて考えている場合じゃない。今は、どうやってなのはたちを言いくるめて、一人で

セツの家に行くかよね。

ｓｉｄｅセツ

放課後。家でナミが来るのを待ってる。来るかどうか分からんがな。いや、来ることは来るだろうが、あいつ一人で来るかどうかだな。２号達がいたら家の中には入れさせるつもり無い。

そういえば、全く関係ないが、買出しに行かないと、食料がほとんど無いな。今度の休みの日にでも買いに行くか。金、あるのかな？家中探せばどっかしら置いてあんだろう。勝手に金使うと、おばさんに怒られそうだが、しょうがない。

そんなことを考えていたら、インターホンがなった。ナミが来たか。一人で来たみたいだから、入れてやるか。

「よくあいつら説得できたな。」

「ははは、かなり苦労したわよ。って言っても、誰一人納得してないんだけどね。

なのはは、ジュエルシードの発動に気付いて、渋々だけどそっちに行ってくれたから良かったけど、アリサとすずかはなかなかいうこと聞いてくれなくて。どうにか撒いてきたけど、下手したら来ちゃうんじゃないかな？」

いや、そんなの聞いてないんだが、下手したら来るだと？まぁ、来ても入れてやらんから構わないがな。

「じゃ、ちょっと待ってろ。今もって来る。」

コアドリルを持って、ナミのところに戻る。

「ほら、これだ。」

「本当にコアドリルだ。で、話はしたの？」

「まだだ。お前が来なきゃ、話する気、無かったからな。」

「ふ～ん。まぁいいや。早く話してよ。」

「・・・・コ、コアドリル？」

いや、なんつうか、すっげー馬鹿みたい。玩具に話かけてんだぜ、俺。傍から見たら頭のおかしい人だろ。絶対に家の中以外ではこんなこと出来ねぇな。

「あ～ら、ようやくお呼びかしら。もう、待ちくたびれちゃったじゃな～い。」

・・・・・・・・・・・・・・。これは？前、こんなしゃべり方だったか？いや、とういうより、この声（分かるわけないよな文章だもん。）、このしゃべり方、リーロンじゃねぇ？

「セツ？私、グレンラガンてあまり知らないんだけど、これって・・・。」

？こいつ、グレンラガンのことあまり知らなかったのか。ま、別にどうでもいいけどな。

「ああ、リーロンだよな。」

「うふふふ、お気づき見たいね。みんなのアイドル、リーロンよ〜ん。」

うん、リーロンって、かなり好きなキャラだったんだけど、実際にこういうしゃべり方されると、かなり腹立つな。

「なぁ、ナミ。」

「何よ。早く色々聞いてよね。」

「やめていいか？このままこいつと話してると、我慢できなくなりそうだ。」

「な！ちょっと、いきなりなに言い出すのよ。まだ何も話してないじゃない。」

「あ〜らお気に召さなかったかしら？それなら、こんなのはどぅお？」

そんなことを言ったとたん、コアドリルのしゃべり方が変わった。

「お！なんだ！？なんかようか？」

ん？これは。

「アーテンボローか？」

あいつは、最高だよ。マジで。ダイグレンに乗ってる奴らの中では一番好きだよ。

「アーテンボローって、あのお調子者って言うか、そそっかしいやつよね。むやみやたらに主砲とか撃ちまくる奴。」

「よっしゃ！主砲発射！！」

は？何でいきなり！！

とか思った瞬間、ダイグレンの肩についている肩連装砲だと思われるものが俺の肩に現れた、と思う。いや、いきなりで、驚いたのもあるし、砲身が邪魔して自分の肩なんて見にくいからはっきりそうだとは言い切れないけど多分そうなってるんだと思う。

ん？待て、こいつ、主砲発射って言ったよな。って事は、撃つ気か！？んな馬鹿な。

・・・・・・。いつになっても何も起きないのだが。

「あっ！そうだった。俺の意思だけじゃ撃てないんだっけ。」

とかとぼけたような声で言いやがった。まぁ、こいつはこういう性格だったけどさ、リーロン同様、実際にこういう奴、ものすごくむかつくな。俺が好きなキャラってこんなのばっかりなのかな？ちょっと自分の好みを疑うよ。

「ナミ、本気でやめていいか。というより、今すぐこれぶっ壊していいか？」

「ちょ、待ってよ。やめるのはいいけど、壊すのは絶対駄目。って、やめるのも駄目よ。ちゃんと話してもらうわよ。

ねぇ、コアドリル、でいいのかな？もっと普通にしゃべれないの？そうしないとあんた、本当に壊されちゃうわよ。」

「・・・。申し訳ありません。こうすれば気に入ってもらえると思ったのですが、逆効果のようでした。以後気をつけます。」

「ほら、これでいいでしょ？もう壊すとか言わないでよ。」

「ちっ、しゃーねぇな。

・・・。ん？何を話ゃいいんだ？俺は別に聞きたいことねぇーぞ。」

「マスター、ご自身の状況をどこまでご存知ですか？」

「マスターって俺のことか？やめろ、気持ち悪い。

状況ってのは、俺が井上峻ってガキになってるってことか？それとも、今俺がいるこの世界が、ナミいわゆるアニメの世界ってことか？」

「では、なんとお呼びすればよろしいでしょうか？

両方です。井上峻になっているということは、特に言うことはありません。この世界が何のアニメかは？」

「好きにしろ。井上でも峻でも加藤でも雪人でも何でもいい。あと、さんやら君やら付けんなよ。嫌いなんだよそういうの。呼び捨てでいい。

2号が主人公のエセ魔法少女物。内容は全く知らんし、知りたくも無い。」

「そこまで分かっているのでしたら、今のところ問題はないでしょう。」

「エセ魔法少女物って。ちゃんとした魔法少女物よ。無印とA'Sは。ｓｔｓは微妙かもしれないけど。
　内容、少しは知っといてよね。そうじゃないともし巻き込まれたとしても何にも出来ないでしょ！」

A'Sやらｓｔｓやら訳の分からんこといいやがって。３部作か？このアニメ。
ちゃんとした魔法少女物とか言ってるけど、あんな化け物出てきたら、戦闘物にしかならんだろ。

「まぁ、そんなことより、ねぇ、セツの能力ってなんなの？」

「魔力は最低でもSランクです。天元突破グレンラガンというアニメに出てきた武器、技、能力、その他色々、グレンラガンに出てきたものなら全て使用可能です。」

なんかよく分からんが、凄い事言ってないか？技って、ギガドリルブレイク使えるのか？俺が？ありえん。ありえちゃいけない。グレン団の魂であるあの技を俺なんかが・・・。いや、でも使えるなら一回でいいから使ってみたい。でも、あ～！やべぇ。
い、いや、待て。なに考えてんだ？大体、そんなことが出来るわけがないだろ。冷静になって考えればわかることだ。

「それだけ？いや、まぁ、それだけでも十分チートなのかもしれないけど、本当にそれだけなの？
　あと、最低でもSランクってどういうこと？」

何でお前がそこまで喰いついてんだよ。

「グレンラガン関係の能力以外つけても使わない、もしくは使い方

を知らずに使うことが出来ないだろうと判断されたためです。
　よほどの魔力を瞬時に消費しなければ常にSランクの魔力はあるということです。」

「グレンラガン以外の能力が付いてないってことについては、ものすごく納得できた。
　よほどの魔力ってのはどれくらいのこと？あと、最大魔力は？」

「宇宙創成並みの魔力を使えばSランク以下になると思われます。最大魔力は・・・雪人・・・しだいです。」

もっと普通に名前を呼べないのか？まぁ、いいか。そのうち慣れんだろ。
宇宙創成並って、あ！そうか。グレンラガンに出てきた技だからアンスパさんの技も使えるのか。でも、インフィニティ・ビックバン・ストーム、使うつもりか？んなモン使ったら、地球無くなんだろ。

「セツしだいって？」

「螺旋力と一緒です。簡単に言えば気合があればあるだけ魔力が出来るということです。正確には違いますが、そう考えてもらってかまいません。」

ま、あれをちゃんと説明すんの面倒だよな。といっても、俺も完璧に理解できてるかどうか怪しいけどな。もし説明しろっていわれたら、「俺が勝手にそうに理解してるだけだ」って言ってから、もしくは後からそう付け加えて説明すると思う。

「ふ～ん。なんか凄いのかどうかよく分からないわね。けどまぁ、最低Sランクあるなら、何の問題も無いわよね。」

何の問題もない？俺はほとんど理解できてねぇけどな。グレンラガン関係の言葉とかは理解できたが、それを使えるだのSランクだのと訳の分からんことを。

「で、俺にどうしろと？話し聞くだけ聞いてやったけど、別段俺が如何こうする事は無いよな。ただ単によく分からん力が使えるだけだろ？で、それを使う必要は無いよな。本来、俺がいなくてもちゃんと完結する話なんだろ。」

「・・・。そうです。多少違いが生じると思われますが、恐らく・・・雪人がいなくても無事に終わるでしょう。」

「ちょ、コアドリル。何余計なこと言ってるのよ。そんな事言ったら手伝って貰えなくなっちゃうじゃない。」

「ですが、より良い結末を迎えるために、雪人の力が必要なのです。」

お！普通に名前呼ぶようになったな。随分早かった。

「そんなの俺の知ったことか。大体、勝手にそんな変えていいものなのか？これアニメ作ったやつだって苦労して作ったんだろ。それを気に入らないからって勝手に好きなように話変えるとか、このアニメ作った奴等に失礼だろうが。」

「・・・。セツ、あんた、尤もらしい事言ってるけど、ただ単に面倒なだけでしょ。」

「あたぼうよ！前にも言ったが、グレンラガンの話を変えようとし

てんなら、全力で阻止すっけど、こんな名前以前に存在も知らなかったアニメがどうなろうとかまわん。
つーことで、この話は終わり終わり。」

第8話　どうにか年内に更新！（後書き）

え～、リーロンとアーテンボローを出して？見ました。あの方達のしゃべり方を文章にするのに苦労したのに、いまいちな出来になってしまいました。ごめんなさい。でも、これをやっておかないと、後々考えている話が出来ないもので・・・。

明日からようやく仕事が休みになるのですが、予定がぎっしりで、書けるかどうか分かりません。なので、次回更新までまた結構時間がかかってしまうと思います。本当に御免なさい。

いい加減ペース上げないと完結まで何年かかるか分からないのに・・・。

第9話　祝！グレンラガン、スパロボ参戦決定！！（前書き）

発表されてから、随分たって今更感のあるサブタイですが、気にしないで下さい。

キリのいい所できったので、今回も短めです。ごめんなさい。

第9話　祝！グレンラガン、スパロボ参戦決定！！

「もう。ま、今日はこの辺でいいわよ。また今度ね。
　そういえば、今日、あんたにしては珍しく寝ぼけてたじゃない。あんたが寝ぼけたところなんて見たの初めてじゃない？どんな夢見てたのよ。大事な話らしいけど。」

今度は無いと思うが、まあいいや。にしても、いらねぇこと覚えてんなこいつ。どうすっかな？本当のこと話すか？悩むな。話せば何か解決策教えてもらえるかも知れんが、話したくない。話したら話したで面倒事になりそうだし・・・。とりあえず今ははぐらかすか。無理だと思うけどな。

「ああ、気にすんな。ただ疲れがたまってただけだ。夢の内容は覚えてるわけ無い。つーか、よく言うだろ？夢の内容は覚えてないものだって。」

「はぁ、本当のことを言う気は無し…か。まぁいいわ。今回は大目に見てあげる。私の頼みも聞いてもらったしね。けど、話したくなったら話してよね。」

め、珍しいこともあるもんだな。驚いたよ。こんなにすんなり引くなんて。良かったからいいんだけどな。

「おし、どーすっか。もう5時か。お前、飯食ってくか？」

「ん？あんたが作るの？」

「そのつもりだ。お前が作りたければ作ってもかまわないが、お前が作ったものは卵焼き以外何も食わんからな。自分で全部食えよ。」

こいつの作った飯はクソまずいんだ。食えなくは無いけど、味なんかほとんど気にせず量を食えれば良いっていう俺がまずくて食いたくないって言うほどまずい。卵焼き以外はな。なぜか卵焼きだけはべらぼうに美味い。特に厚焼き玉子。

「あ、やっぱり。けど、私、結構上手になったのよ。母さんに色々教えてもらったから。あ、今の母さんだからね。桃子さんのほう。」

「へ〜。でも、俺は食わん。」

「あっそ。うん、私もいいや。あんたの作ったご飯食べるんなら、母さんのご飯食べたほうが断然いいもの。」

「だろうな。多分、かなり美味かったもんな。あの飯。」

「多分ってあんた。本当に味わかんない人よね。
ま、美味いってわかってるんなら食べに来る？歓迎してくれると思うわよ。」

こいつ、なんて返されるか分かっててていってるよな？

「そうか、なら、ご馳走になりに行くか。」

お！一瞬だが驚いた顔になりやがった。すぐに呆れた顔になったがな。

「「とでも言うと思ったか。」」

見事にハモッタな。

「やっぱりそうなるよね。一瞬でも喜んだ私が愚かだった。」

？喜ぶことなのか。ま、愚かだったってことは認めてやるがな。

「じゃあ、私は帰るわね。また明日。学校で。」

「おう、じゃあな。」

「待ってください。」

あ、コアドリルのことすっかり忘れてた。

「？どうしたの？

あ、そうだ私のことは、ん～、ナミでいいかな。うん。ナミって呼んで。私も呼び捨てでいいからね。」

「ではナミ。あなたの情報は先日追記データとして送られてきて知ってはいるのですが、その情報によると、デバイスらしき物をあなたもお持ちですよね？」

お、ナミの表情が一瞬暗くなった。すぐにいつも通りに戻ったけどな。

「うん。一応、デバイスではないけどアルのＡＩつきの腕時計を持ってるわ。ただ、昨日、ラムダ・ドライバ使った後、壊れたんじゃないと思うけど、うんともすんとも言わなくなっちゃったのよ。」

「そうですか。恐らくそれは、何かの追記データもしくは新規データが送られてきて、その処理をしているためだと思われます。」

「本当!?良かったぁ～。ホントにもう、壊れてたらどうしようかってすっごい悩んでたのよ。

ねぇ、それってどれくらいで終わるの?」

「そのＡＩの性能をよく知りませんのではっきりとは申し上げられませんが、遅くも受信から２４時間以内には終わると思います。」

「２４時間、まだ少しあるわね。でも早ければ終わってもおかしくないわよね。早く終わんないかな。」

・・・。何でも構わねぇけど、くだらねぇことならテメェの家でやれよ?普通の雑談とかならいくらでも相手してやるけど、さっきみたいな訳の分からん話はもう勘弁だ。

「アル?まだ終わんないの?」

だからそういうのはここでやるなって言ってんだろ。いや、まぁ、声に出してないけどさ。それくらい判れよな。

「声紋チェック完了。ミズ・タカマチと確認。用件をどうぞ。」

うわ!?何だ、これ。すっげー違和感ありまくりな音声。コアドリルとは全然違うよ。あ～、でも俺はこっちのほうが好みかもしんねぇ。でも、ずっとこんなんだと嫌になりそうか。

「え?あ!終わったの!!」

「教育メッセージ。“終わったの”の対象を定義して下さい。」

めんどくさ！何だこいつ。それくらい判れよ。

「えっと、なんか新しい情報を受信してたんでしょ？終わったのっていうのはその処理が終わったかどうかを聞いたの」

「肯定。新規データの受信及び処理は終了しました。内容の文章による提示は不可能、音声のみによる通知が可能。通知しますか。」

「じゃあ、お願い。あ、ちょっと待って。それって、一回だけじゃないわよね？聞きたいときにいつでも聞ける？」

「肯定。ご命令があればいつでも何度でも通知可能。」

「よし。それじゃあお願い。」

「ちょっと待て。何でここでやる？そんなこと、帰ってからやればいいだろ。」

「いいじゃない。セツにも聞いといてもらいたいし、ね。」

「っち、まあいい。さっさとしろよ。時間がもったいない。」

「ありがと。じゃあ、改めてお願いね。」

「了解。ミズ・タカマチの脳波パターン強制刷り込み及び、“ＳＧＴサガラ”の脳波パターンの強制削除。以後ラムダ・ドライバの駆動はミズ・タカマチのみが可能。

ラムダ・ドライバの連続駆動は不可能。駆動後、最低２０時間、

最大４８時間のインターバルが必要。」

「に、２０時間から４８時間！？そんなに必要なの！え、そ、その必要な時間って何を基準に決まるの？」

「ラムダ・ドライバ駆動時のミズ・タカマチの精神状態及び、ラムダ・ドライバの威力により決定されます。」

「えっと、じゃあ、昨日のあれで、どれくらい必要なの？」

「先日の駆動時、ミズ・タカマチの精神状態、正常。威力弱。２２時間のインターバルが必要。次回ラムダ・ドライバ駆動までおよそ４時間必要。」

嫌になるかと思ったけど、なれると意外といいかもな。これの音。まぁ、時と場合にもよるかもしれないけど。

「分かった。ありがと。他には何も無いの？」

「肯定。」

「そういえば、宗介の脳波パターンとかって、消したり初期化できなくてしょうがないから宗介がアーバレスを使うことになったのよね。何で消せたの？っていうかどっからそのデータ受け取ったの？」

「その質問に対する音声データを確認。再生しますか？」

「え？音声データ？・・・。なんとなく想像できるな。言われる事。聞きたいような聞きたくないような・・・。

せっかくだしお願い。」

「『君には知る必要が無い』」

なんかいい感じ声が出たけど、意味あったのか？

「やっぱり。少佐の声でそれを言うのよね。想像通り。ま、好きな声優の声聴けたし、良かったとしよう。」

「で、終りか？」

「あ、うん。とりあえず、もう特に無いかな。じゃ、本当にそろそろ帰るわね。」

「ああ。またな。気をつけ・・・無くてもいいか。」

「何よそれ。普通に気をつけて帰れよって言えばいいじゃない。全く。」

「ハッ、気にすんな。そんな普通の事言ったら、俺じゃないだろ。」

「まぁ、そうなんだけどね。まあいいや。じゃあね。また明日。」

「おう、じゃあな。」

第9話　祝！グレンラガン、スパロボ参戦決定！！（後書き）

年末年始の休み以降、今年まだ一回も休みが無く、こちらに割く時間が・・・。すみません。ただの言い訳ですよね。

どうにか、セツ、ナミとオリ主の設定がある程度書けました。ここまで来るのにドンだけかかってんだろう・・・。

予定として次回は原作で言えば日曜日のサッカーで、街中でのジュエルシードの発動。これをまあ、適当にいじくって書こうと思っています。

では、次回もぜひよろしくお願いします。

第１０話　・・・、サブタイトル、思い付かん。（前書き）

結構無理やりです。

今回、質屋なるものが出ていますが、自分は質屋なるものに行った事がないので、実際、どういう風になっているのか知らないので適当です。ご了承ください。

第１０話　・・・、サブタイトル、思い付かん。

あれから数日がたち、今日は日曜日。
とりあえず今日の予定は、まず、無理かもしれないけどガキでも利用できそうな質屋を探し、金を作ってから、食料調達だな。それ以外は何にも無い。だから、それさえ忘れなければ、今日一日、一人で自由気ままだ！誰にも邪魔されずに一日過ごせるって、すっげー久しぶりな気がするよ。なんか最近になって昔ナミが俺に言ってきた言葉の意味が理解できた気がする。

“孤独とは贅沢品なのだ”

最初に聞いた時は、何を馬鹿なことを、としか思わなかったが、最近本当にこの言葉は正しいんじゃないかと思ってきてる。最近は本当に、学校に行かされるし、学校では誰かしら俺に近づいてくるわ、話しかけてくるわ、ナミやナミの愉快な仲間達が無駄に絡んできて、そのせいで、他の男共にいちゃもん付けられるわで一人でいられることなんて以前に比べれば激減だからな。っと、話がそれたか。

できっだけ、ぼろそうな質屋を探すべきか？どっちにしろ無理かもしれんな。まあ、考えてもしょうがないからとりあえず探してみよう。もし、そこで金が作れなくても、多少は家の中に金があったからそれで済ませよう。

質屋が使えるかどうか以前に、こいつが売れるかどうかもわかんねぇけどな。
こいつってのは、この間、多分知らねぇ奴に相談持ちかけられてさ、断ったんだが（無視した）やたらとしつこくて適当に答えたらお礼

だとか言って、青い石ころをよこしたんだよ。宝石とか全然知らないけどなんか宝石っぽかったから売れば金になるかなぁ～、なんて思ってさ。売れなくて当たり前、売れればラッキー程度の気持ちで行くよ。

ったくよ、あいつも告白がどうとか俺に相談するくらいならこの石ころくれてやればよかったんじゃねーの？かなりきれいな石だしよ。宝石じゃなくても女なら喜ぶだろ？

ふぅ、ようやく見つけた。かれこれ5時間くらい彷徨い探し続けてたよ。

けど・・・。本当に大丈夫か？ここ。TVとかに出てきそうな、いかにもボロイっていうか怪しいって感じの建物だぞ。そういうのを探してたといえば探してたんだが。まぁ、とりあえず入ってみるか。

「ちわ～。客が来ましたよ～。」

とぼそりと、聞こえないように呟く。

中は結構きれいだな。

「いらっしゃい。ん？どうした？迷子か？」

店の人も見た目はごくごく普通のおっちゃんだ。良かったよかった。

「いえ、迷子ではないです。これをお金に換えてもらいたくて来たんですけど。大丈夫ですか？今親いないんですけど。」

そういって石ころをおっちゃんの前におく。

「お～！何だお客さんだったか！そうかそうか。いいぞ。で、これ

か。」

といって、石ころを手に持って四方八方から見たり色々している。いいのか？ま、何も言ってこないなら、黙ってよ。余計な事言って追い出されても嫌だし。

「本当は駄目なんだけどね～。でもそんな事言ってたら、このご時世、商売なんかやってらんないっての。って子供に言ってもわかんないか。それに、ウチもこの商売始めたばっかりで客を選ぶなんて事できやしねぇえっての。」

とか、石ころを見ながら、言っている。俺は適当に相槌を打っているだけだ。

「よし！」

ん？もう終わったのか？こういうとこ来んの初めてだから良く分からんが、早くね？

「いまいち分からん。」

はぁ？

多分、いや、絶対顔に出ていたのだろう。おっちゃんが俺の顔を見て、すぐに言い訳を言い始めた。

「さっきも言った通り、この商売始めたばっかりでな、有名な宝石とかならすぐ分かるが、こんな石は知らないんだよ。でも、宝石の種類はあらかた全部覚えているつもりだ。名前が出てこなくても、現物を見れば図鑑のどのあたりに載っているかすぐに分かる。それで分からないってことは、これはただの石ころか、まだ発見されて

いない新種の宝石か、まぁ、そのどっちかだ。最悪、俺が忘れているだけかも知れんがな。ハッハッハ。」

・・・なんなんだ？このおっちゃん。本当に大丈夫か？

「で、金に換えてもらえるのか？」

「悪いが無理だ！」

やっぱり。・・・しょうがない、手持ちの金だけでどうにかするか。

「でもがっかりする事は無いぞ。今度は親御さんと一緒に、ちゃんとした所行ってみな。本当にそれが新種の宝石なら莫大な金になるぞ。まぁ、その可能性は低いがな。ハッハッハ。」

このおっちゃん、ここがまともな店じゃないって認めたな。ま、いいや。

「分かった。ありがと。」

そう言って店から出る。

すっげー適当？なおっちゃんだったけど、あんまり嫌いになれなかったな。こういうことは珍しい。本当に。と言ってももう二度と来ないだろう。

さて、買い物は帰りにするとして、どこ行くか。

・・・・・。行くとこねぇな。適当に彷徨って、目に付いた所、片っ端から行ってみるか。

「ねぇ、僕？」

なんか嫌な予感すんな。

「その石ころ、お兄ちゃん達にくれないかな？」

高校くらいの男が3人。

はぁ、めんどくさ。カツアゲか？ん？金じゃなくてもカツアゲって言うのか？

にしても、なんでこうなった？さっきの店の中での話し、聞いてたのか？あのおっちゃん、声でかかったし、外に漏れてもおかしくない？まさかな。もう、どうでもいいや。

せっかく、久しぶりの孤独という贅沢を壊しやがって。

こいつら、潰す。

さて、あいつらがどうなったとか、どうやってあそこを切り抜けたかはご想像に任せるよ。

さて、気を取り直して、散策再開！

「それを渡して下さい。」

後ろから女の声が聞こえたとほぼ同時に

ブチッ！

・・・俺の中で何かが切れる音がした。

「それを、ジュエルシードを渡して下さい。」

なをも何かを言い続ける女。

俺は振り向きざまに

「ふざけんなぁぁぁ！！！なんなんだよ、どいつもこいつも、俺の邪魔べぇしやがって。そんなに俺が自由に、気ままに、好き勝手行動することが気に食わねえのか！ふざけんじゃねえ！もう誰も俺に近づくな！話しかけるな！もう二度と俺の自由の邪魔ぁ、すんじゃねぇぇぇ！！！」

と叫んだ。

その瞬間、多分俺の持っていた石ころが激しく光り、俺は気を失った。

第１１話　予定の半分以下しか書けなかった…。（前書き）

どうも、お久しぶりです。そしてごめんなさい。

取り合えず、生存報告というか、まあ、そんな感じで今出来ているところまで投稿します。なので、とても短いです。

第１１話　予定の半分以下しか書けなかった…。

ｓｉｄｅナミ

セツの家で話をしてから数日。今日は日曜日。サッカーの試合の日。セツにも応援に行こうと誘ったけど、答えは言うまでもないか。よく二次小説とで、体が子供になると精神も引っ張られて子供っぽくなるとかそういうのをよく見たから、セツも少しそうなるかな～なんて無駄な期待してたけど、やっぱり無駄みたいだ。子供っぽくなるどころか、前より大人になってるんじゃないかな？多分。まぁ、考え方によっては、十分子供っぽいんだけどね。

ジュエルシード集めは何の問題もなく順調に進んでる。私なんて必要ないくらいにね。だって、私、あれ以来一回もラムダ・ドライバ、使ってないもん。使わなくても、なのはとユーノだけでどうにかなっちゃうから使う必要ないのよね。まぁ、ユーノもほとんど何もしないから、なのはだけで十分なのかもしれないけど。

他にも言いたいことはあるけど、無駄な事が多そうだからやめとくわ。さてと、そろそろなのはを起こして、応援に行く準備でもしますか。

で、グランドに到着。

私、サッカーはあんまり詳しくないのよね。ボールを相手のゴールに蹴り込む事くらいしか知らないし。ま、応援だし適当に「頑張れ～！」とでも言っとけばいいか。

それより、あの子よね。ジュエルシード持ってるのって。さて、ど

うしようか。発動前に何かしら理由つけて譲ってもらうってのも有りかもしれないけど、私的には、結構重要な話なのよね。今回のは。もう少し様子を見よう。

・・・？どうしたんだろう。ジュエルシードを持ってると思われる男の子、マネージャーのほうをずっと見てる。もちろんそんなのは可笑しくない。けど、マネージャーがその男の子のほうを見ると、急いで顔を逸らしてる。恥ずかしがってるというより、怯えてるって感じ。

「聞いてるの？ユキ！」

急にアリサが話かけてきた。
ちょっと考えすぎてた。何も聞いてなかったな。

「ごめん、気になることあって、聞いてなかった。」

「あんたね～、まぁいいわ。なにが気になるのよ。」

「え、あ、あの男の子のことなんだけど・・・」

と言い、指をさす。

「あいつがどうしたって言うのよ。」

「マネージャーのほう見てるじゃない。」

「それがなんなのよ！」

「あ、今、」

ん、すずかが何かに気付いた。

「気付いた？」

「多分。」

「なんなのよ！分かるようにいいなさいよ！」

すずかに、“言ってみて”っていう風な視線を送ると、それに気付いたみたい。

「うんとね、あの子、マネージャーさんと目が合うと、怯えるようにして顔をそむけてるってことだよね？」

私に確認するように聞いてくる。黙って頷くと、アリサもそのことに気付いたみたい。でもそれがどうしたのよって言いたげな顔をしてる。

「あ！あの子！」

急になのはが声を上げた。

「いきなりどうした？」

「ふぇ、ご、ごめん。なんでもない。にゃははは。」

どう見ても何かあるわよね。ジュエルシードに気付くのってもっと後だったわよね。それとも原作とは違いが出てきてるのかな。ま、いいか。私は今すぐに追求するつもりは無かったんだけど、

「なのは！隠しても無駄よ！言いなさい！」
とアリサに攻められてる。なのはも観念したのか、言い出す。って事はジュエルシードは関係ないか。
「あの子、昨日、井上君とお話してたの。」
ん？セツと？お話？
「それってちゃんとした会話だったの？あの子が一方的に何か言ってるとかじゃなくて？」
あいつがまともに他人と会話してるところなんか、こっちに来てからあんまり無い。全く無いわけでもないし、おかしい事じゃないけど・・・、やっぱりありえなさそう。
「内容は聞こえなかったけど、ちゃんとお話してるように見えたよ。お礼を言って別れてたし。」
「へぇ～、珍しいこともあるモンね。」
「本当にね。あいつが会話なんて。ユキ以外はほとんど無視なのに。」
と、まあ、その後も適当に雑談及び、応援をしていて、試合も終り、翠屋に向かおうとした時、ジュエルシードの発動に気付いた。なのはとユーノも気付いたようで、目を合わせる。
「私が適当に理由付けとくから、さっきに行って。」

と、念話で伝え、それを聞いたなのはとユーノはジュエルシードに向かって走っていく。

でも、どうして？本来発動させる子は、まだここにいるのに。そういえば、あのことセツが話して、お礼もしてたって言ってたわよね。もしかしてそのときにお礼として、セツにジュエルシードを渡していて、それをセツが発動した？まさか。考えすぎよね。そうよ。そんなことあるはずないじゃない。

早く、適当に言い訳して、私もなのはの後を追わないと。

第１１話　予定の半分以下しか書けなかった…。（後書き）

ものすごいグダグダでした。次回も恐らく絶対グダグダになると思います。そして、時間がかかると思われます。

それでもよろしいと言って頂けるのであれば、次回も読んでやってください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9457m/

原作介入？めんどくさい！

2011年6月2日22時21分発行